

鹿児島大学構内遺跡

桜ヶ丘団地F・G-10区

(中央機械棟)

2012年3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査室



南壁層位断面

序 文

鹿児島大学キャンパスには、後期旧石器時代から近代までの、貴重な遺跡が包蔵されていることが鹿児島大学埋蔵文化財調査室の発掘調査によって明らかにされています。その成果はこれまでに『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』や『鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査報告書』によって報告されてきました。

本書は、平成 20 年度に発掘調査を実施した鹿児島大学構内遺跡桜ヶ丘団地 F・G-10 区(桜ヶ丘キャンパス中央機械棟改修工事に伴う発掘調査)の発掘調査報告書です。本調査では、縄文時代早期の遺物を中心とする後期旧石器時代から近世までの埋蔵文化財を発見いたしました。

埋蔵文化財調査室では、今後とも文化財保護法に基づいた学内の施設整備事業に伴う埋蔵文化財調査を円滑に進めつつ、その調査報告書を刊行することによって、調査成果を社会に還元できるよう全力を尽くす所存です。重ねて、埋蔵文化財調査室の事業についてのご理解・ご支援をお願い申し上げる次第です。

2012 年 3 月

鹿児島大学埋蔵文化財調査室長
新田 栄治

例 言

- 1 本書は2008年度に鹿児島大学埋蔵文化財調査室が実施した鹿児島大学桜ヶ丘団地F・G－10区(中央機械棟)の発掘調査報告である。
- 2 調査時における図面・写真の担当は、寒川朋枝・中村直子である。
- 3 本書の作成にあたっては、埋蔵文化財調査室が行なった。担当者は以下の通りである。
遺物実測：赤尾和洋・恵島瑛子・寒川・河野裕次・篠原美智子・中村・瀨田綾子・東友子・福永美保子
遺物写真：河野・恵島・中村
トレース：赤尾・恵島・寒川・篠原・中村・瀨田・東・福永
作表：河野・中村
執筆：第1章 中村，第2～7章 中村・寒川
編集：中村・寒川・新里貴之
- 4 本書掲載の縄文土器については本田道輝氏(鹿児島大学法文学部)，陶磁器については渡辺芳郎氏(鹿児島大学法文学部)にご教授いただいた。
- 5 本書で報告している遺物の保管は、埋蔵文化財調査室の管理のもと、学内の出土部局収蔵施設に収蔵している。また、図面・写真などの資料は埋蔵文化財調査室に保管している。

凡 例

- 1 1985年6月1日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査に便であるように、鹿児島大学構内座標を郡元団地と桜ヶ丘団地に設定した。その設置基準は以下のとおりである。
 - (1) 郡元団地では、国土座標第2座標系(X=-158,200, Y=-42,400)を基点として一辺50mの方形地区割りを行なった。
 - (2) 桜ヶ丘団地では、国土座標第2座標系(X=-161,600, Y=-44,400)を基点として一辺50mの方形地区割りを行なった(Fig. 2参照)。
- 2 本書における座標は基本的に世界測地系を使用しているが、Fig. 2の桜ヶ丘団地グリッド座標のみ、日本測地系を使用している。
- 2 本書における方位は真北方向を示す。
- 3 本書で使用した遺構の表示記号は、以下の通りである。

SD：溝状遺構 P：ピット
- 4 土層の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
- 5 遺物に関しては観察表を作成した。色調については『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用し、この色調に当てはまらないものについては、「～に類似」と表記した。
- 6 本文中の遺物番号は、挿図、写真、遺物観察表と一致している。

抄 録

ふりがな	かごしまだいがくこうないいせきさくらがおかだんちえふ・じー・じゅっくはっくつちようさほうこく							
シリーズ名	鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査報告書 第7集							
書名	鹿児島大学構内遺跡桜ヶ丘団地 F・G-10 区発掘調査報告							
編著者	中村直子・寒川朋枝・新里貴之							
編集機関	鹿児島大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒 890-8580 鹿児島市郡元一丁目 21 番 24 号 Tel 099-285-7270 Fax 099-285-7271							
発行年月日	2012 年 3 月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
鹿児島大学構内遺跡桜ヶ丘団地	鹿児島市桜ヶ丘八丁目 35 番 1 号	4620	1-114	31.548192°	130.52642°	2008 年 5 月 27 日～ 8 月 8 日	250	中央機械棟改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				特記事項
鹿児島大学構内遺跡桜ヶ丘団地		後期旧石器時代 縄文時代 草創期・ 早期 弥生時代 古代 中世 近世	縄文早期：層位横転 近世：溝, ピット	細石刃・縄文時代草創期土器・岩本式・前平式・石皿・磨石・石・石鏃・剥片石器・弥生土器・陶磁器・古銭				

目次

巻頭カラー写真

序 文

例 言

凡 例

抄 録

第1章 鹿児島大学構内遺跡桜ヶ丘団地の概要	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 過去の調査の経過	1
第3節 主な遺構と遺物	1
(1) 旧石器時代～縄文時代草創期の遺構と遺物	1
(2) 縄文時代早期以降の遺構と遺物	1
(3) 弥生時代の遺構と遺物	1
第2章 調査にいたる経緯	5
第3章 調査体制	5
第4章 発掘調査の経過	6
第5章 基本層位	6
第6章 各層の成果	8
第1節 1層出土遺物	8
第2節 2層の成果	9
(1) 2層上面検出状況	9
(2) 2層出土遺物	10
第3節 3層の成果	14
(1) 3層上面検出遺構と遺構出土遺物	14
(2) 3層出土遺物	16
第4節 4層の成果	17
(1) 4層上面検出遺構	17
(2) 4層出土遺物	17
第5節 5層の成果	29
(1) 5層上面検出遺構	29
(2) 5層出土遺物	32
第6節 7層の成果	46
(1) 7層上面検出状況	46
(2) 7層出土遺物	46
第7章 まとめ	48
第1節 各層の時期	48
第2節 縄文時代早期土器の分類	50

挿図目次

Fig. 1 遺跡の位置	2	Fig. 5 1層・カクラン出土遺物	9
Fig. 2 鹿児島大学桜ヶ丘団地構内図	3	Fig. 6 表土除去後平面図と2層上面遺物出土状況	10
Fig. 3 調査区の位置	5	Fig. 7 2層出土遺物	11
Fig. 4 層位断面図	7		

Fig. 8	3層上面検出遺構	15	Fig. 20	5層出土遺物(2)	34
Fig. 9	SD1 出土遺物	16	Fig. 21	5層出土遺物(3)	35
Fig. 10	3層出土遺物	17	Fig. 22	5層出土遺物(4)	36
Fig. 11	4層上面検出遺構	18	Fig. 23	5層出土遺物(5)	39
Fig. 12	4層遺物出土状況	19	Fig. 24	5層出土遺物(6)	40
Fig. 13	4層出土遺物(1)	21	Fig. 25	7層上面検出状況と7a層・7b層遺物出土状況	46
Fig. 14	4層出土遺物(2)	22	Fig. 26	7c層・7d層調査部分と下層確認トレンチの位置	47
Fig. 15	4層出土遺物(3)	23	Fig. 27	7層出土遺物	48
Fig. 16	5層上面検出遺構	30	Fig. 28	出土縄文早期土器の分類	50
Fig. 17	トレンチ層位断面図	31			
Fig. 18	5層遺物出土状況	31			
Fig. 19	5層出土遺物(1)	33			

表 目 次

Tab. 1	桜ヶ丘団地発掘調査一覧	4	Tab. 10	4層出土遺物観察表(1)	27
Tab. 2	1層・カクラン出土遺物観察表(1)	8	Tab. 11	4層出土遺物観察表(2)	28
Tab. 3	1層・カクラン出土遺物観察表(2)	8	Tab. 12	4層出土遺物観察表(3)	28
Tab. 4	2層出土遺物観察表(1)	13	Tab. 13	5層上面検出遺構一覧	32
Tab. 5	2層出土遺物観察表(2)	13	Tab. 14	5層出土遺物観察表(1)	43
Tab. 6	3層上面検出遺構一覧	14	Tab. 15	5層出土遺物観察表(2)	44
Tab. 7	SD1 出土遺物観察表	16	Tab. 16	5層出土遺物観察表(3)	45
Tab. 8	3層出土遺物観察表	16	Tab. 17	7層出土遺物観察表	48
Tab. 9	4層上面検出遺構一覧表	19	Tab. 18	層別遺物出土状況	49

図 版 目 次

PL. 1	遺跡見学会の様子	6	PL. 22	4層出土遺物(3)	26
PL. 2	南壁層位	6	PL. 23	5層上面検出状況	29
PL. 3	西壁層位	6	PL. 24	1トレンチ南壁	29
PL. 4	深堀トレンチ2北壁	6	PL. 25	2トレンチ完掘および北壁	29
PL. 5	表土除去後全景	8	PL. 26	2トレンチ出土礫群	29
PL. 6	1層・カクラン出土遺物	9	PL. 27	2トレンチ周辺層位横転	29
PL. 7	2層出土遺物	12	PL. 28	2トレンチ5層出土前平式土器	29
PL. 8	SD1～SD3 検出状況	14	PL. 29	5層出土遺物(1)	37
PL. 9	SD1～SD3 完掘	14	PL. 30	5層出土遺物(2)	38
PL.10	SD1 完掘状況	14	PL. 31	5層出土遺物(3)	41
PL.11	SD1 出土遺物	16	PL. 32	5層出土遺物(4)	42
PL.12	3層出土遺物	17	PL. 33	6層上面検出状況	45
PL. 13	4層上面遺構検出状況	20	PL. 34	5層完掘状況	45
PL. 14	SD4 埋土断面	20	PL. 35	6層土重機掘削状況	45
PL. 15	SD4 完掘	20			
PL. 16	P2 埋土断面	20	PL. 36	7層上面検出状況	47
PL. 17	P3 埋土断面	20			
PL. 18	A区下段層位横転	20	PL. 37	縄文時代草創期土器片出土状況	47
PL. 19	4層上面遺構完掘	20	PL. 38	細石刃出土状況	48
PL. 20	4層出土遺物(1)	24	PL. 39	調査完掘状況	48
PL. 21	4層出土遺物(2)	25	PL. 40	7層出土遺物	48

第1章 鹿兒島大学構内遺跡桜ヶ丘団地の概要

第1節 遺跡の位置と環境

鹿兒島大学構内遺跡桜ヶ丘団地は鹿兒島市南部の、東側に錦江湾を望む亀ヶ原台地上の東端部に立地する (Fig. 1)。後期旧石器時代・縄文時代草創期・早期・後期・晩期・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世の複合遺跡となっている。

桜ヶ丘団地には、火山灰層が複数確認できる。上位から、喜界カルデラを起源とするアカホヤ火山灰層 (約 7300 年前)、桜島を起源とする薩摩火山灰層 (約 13000 年前) と桜島・高峠 6 火山灰層 (約 26000 年前)、始良カルデラを起源とする始良丹沢火山灰層 (約 30000 年前) である。埋蔵文化財が確認されるのは p17 よりも上位の層からである。

桜ヶ丘団地の南側には東の平野部に向かって舌状に伸びる魚見ヶ原台地があり、その端部には魚見ヶ原遺跡がある。弥生時代から古墳時代の遺跡で、桜ヶ丘団地で確認されている遺構・遺物 (Tab. 1 87-3・94-1) の時期とも重なる。周辺の台地上は、現在は住宅地を中心とした市街地となっているが、厚い火山灰層に覆われている部分も多く、一帯には良好な遺跡が存在していると思われる。

第2節 過去の調査の経過

1970～1971年に本田道輝氏・中間研志氏らによって分布調査が行われ、縄文時代を中心とする遺物が採集されている (鹿兒島大学埋蔵文化財調査室, 1986)。1985年度以降は、その年に設置された鹿兒島大学埋蔵文化財調査室によって調査が行われている。埋蔵文化財調査室が設置された1985年に、キャンパス (= 団地) ほぼ全域が周知の遺跡となり、2011年までに本調査9件が実施され (Tab. 1)、後期旧石器時代から近世までの埋蔵文化財が確認されている。

第3節 主な遺構と遺物

(1) 旧石器時代～縄文時代草創期の遺構と遺物

薩摩火山灰層の下から陥穴状遺構 6 基、集石遺構 1 基が確認されている。陥穴状遺構は平面形が長方形のものと、円形の 2 つに分類することができ、検出面も異なる。いずれも「チョコ層」と呼ばれる暗褐色粘土層内での検出だが、円形タイプが長方形タイプより下層で検出されている。集石遺構は、拳大の石が数個まとまって出土し、その周辺から黒曜石剥片が数点出土した。この時期の遺物としては石鏃や細石刃が出土しているが、遺物量は少なく、陥穴状遺構の存在からも一帯は狩猟場であったと考えられる。ただし、今回の調査によってチョコ層上面より土器小片が出土したため、北端にあたる中央機械棟周辺は縄文時代草創期には居住域であった可能性もある。

(2) 縄文時代早期以降の遺構と遺物

縄文時代の遺構は薩摩火山灰層の上から、竪穴建物跡 1 基と、集石遺構 1 基、陥穴状遺構 1 基、不定形な土壌が確認されている。竪穴建物跡は平面形が隅丸方形を呈し、床面周囲には小さな柱穴が検出されており、上野原遺跡などの縄文時代早期の建物跡によく類似する。集石遺構は、少し掘り窪めた部分に礫が集められているのが確認された。礫は二次加熱によって赤変しているものもあったが、使用後崩しているものと考えられる。

遺物は、前平式土器を中心として早期の土器と、石鏃、石皿、磨石・敲石等が出土している。また、遺構ではないが、アカホヤ火山灰から薩摩火山灰までの層位横転がアカホヤ火山灰層上から多数検出される。方向などは一定しない。

(3) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、前期から中期の竪穴建物跡群と貯蔵穴と考えられる土壌状遺構が確認されている。また、弥生時代終末期の竪穴建物跡跡と溝状遺構も確認されている。遺物は、高橋式、中期前半の入来Ⅰ式、入来Ⅱ式、中津野式土器が出土している。その他の遺物としては、土製の紡錘車、石鏃、碧玉製の管玉などがある。

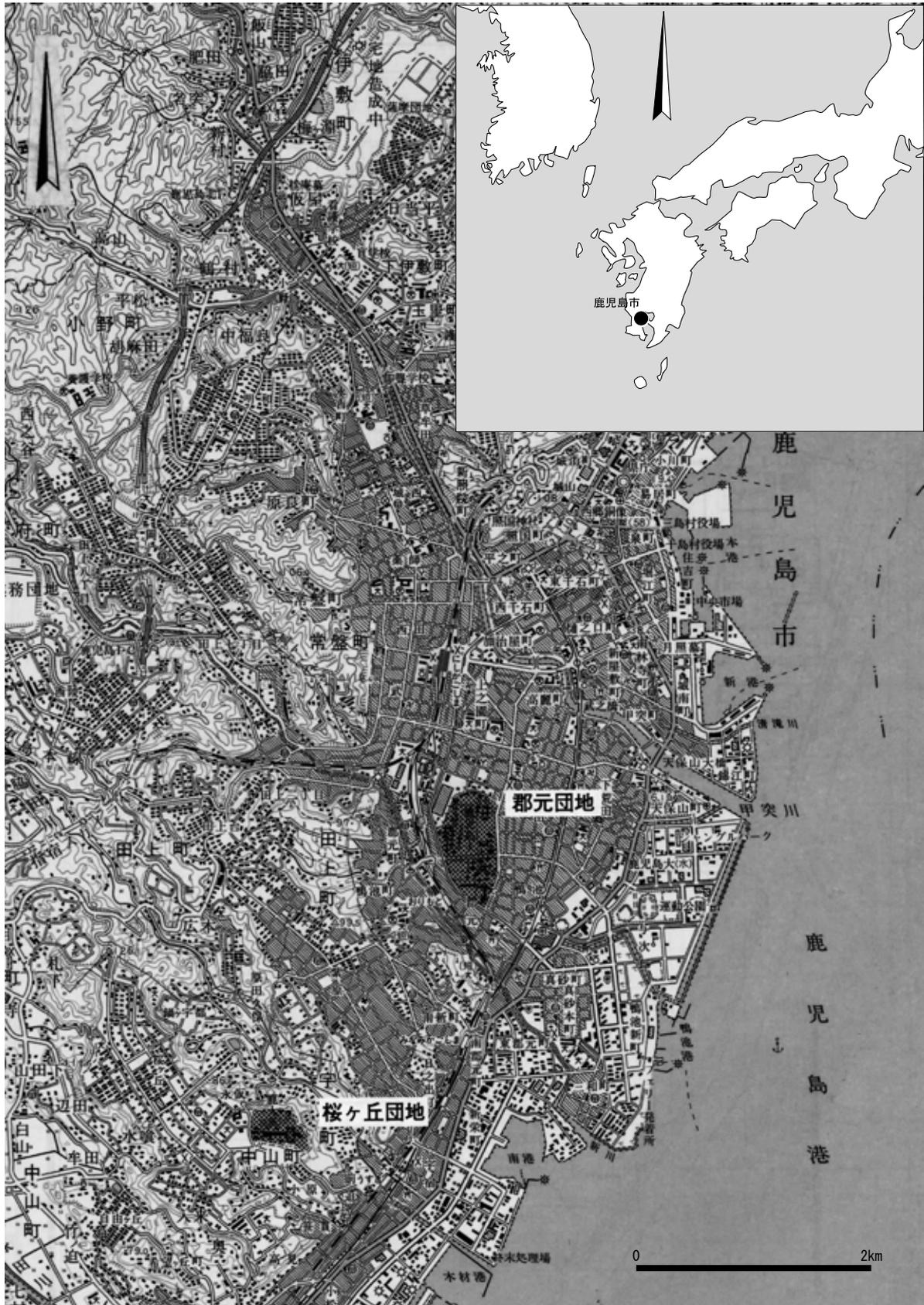


Fig. 1 遺跡の位置 S=1/50,000

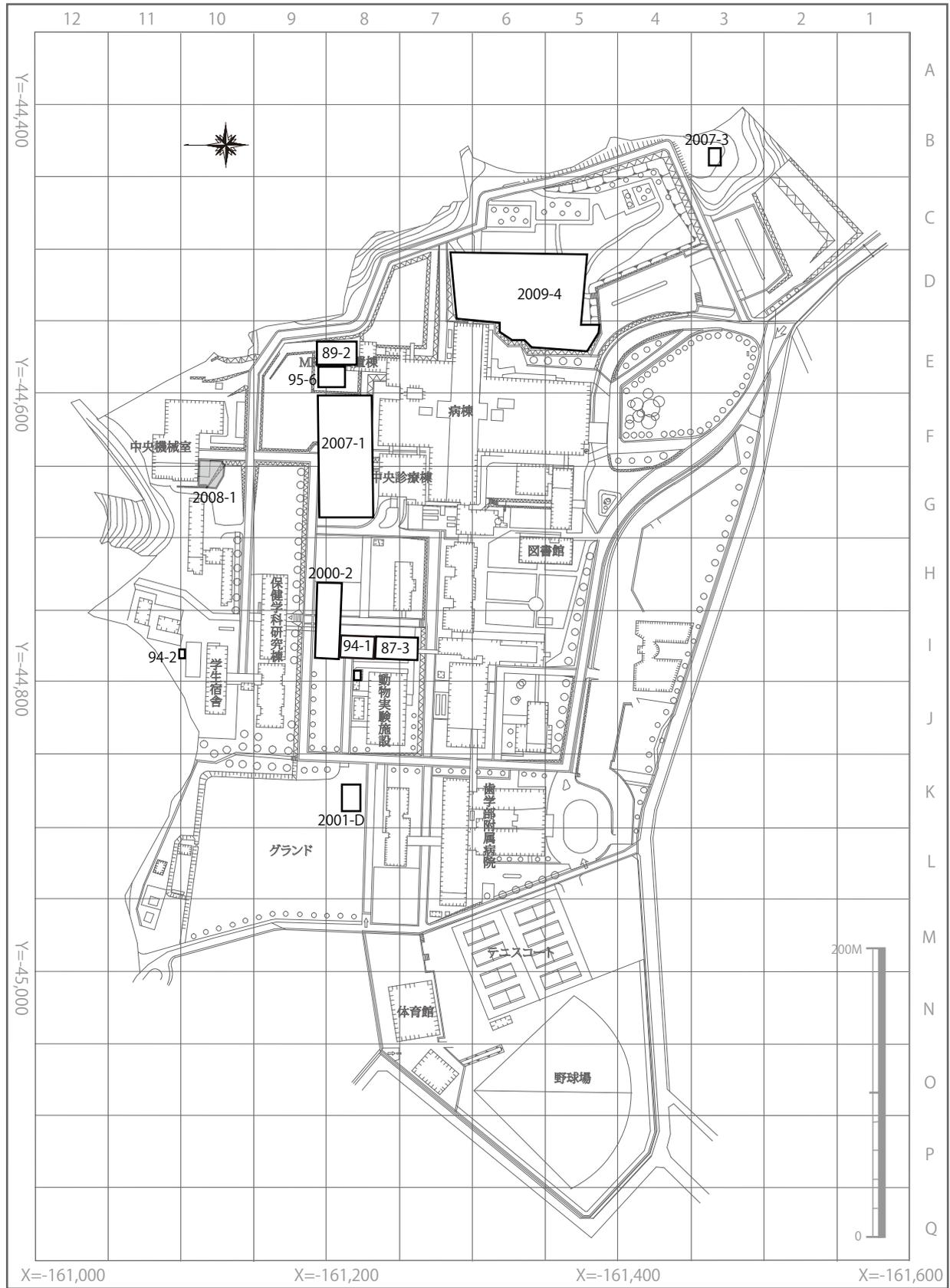


Fig. 2 鹿児島大学桜ヶ丘団地構内図 S=1/4000

Tab. 1 桜ヶ丘団地発掘調査一覧

コード名	調査名	時代	主な遺構	主な遺物	文献
87-3	桜ヶ丘団地I-7・8区(臨床研究棟増築)	縄文時代早期, 弥生時代	弥生時代前期～中期の 竪穴建物跡・貯蔵穴, 弥生時代～古墳時代の 溝状遺構	縄文時代早期土器(前平式), 弥生土器(高橋式, 入来式, 中津野式, 成川式), 青磁, 石鏃, 管玉, 石斧	鹿兒島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ
89-2	桜ヶ丘団地E-8・9区(MRI-CT棟建設)	縄文時代草創期・早期	弥生時代以降の溝状遺構, 縄文時代早期のピット	縄文時代草創期の石鏃, 縄文時代早期土器(前平式)	鹿兒島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅴ
94-1	桜ヶ丘団地I-8区(難治性ウィルス疾患研究センター建設)	縄文時代早期, 弥生時代前期	縄文時代早期の集石遺構, 弥生時代竪穴建物跡, 溝状遺構	縄文土器(前平式), 弥生時代土器(高橋式, 入来式, 中津野式)	鹿兒島大学埋蔵文化財調査室年報16
94-2	桜ヶ丘団地I-10区(受水槽)	縄文時代早期	縄文時代早期の竪穴建物跡	縄文時代早期土器(前平式), 黒曜石剥片石器	鹿兒島大学埋蔵文化財調査室年報14
95-6	桜ヶ丘団地E-8・9区(MRI-CT棟増築)	後期旧石器時代, 縄文時代早期・晩期, 弥生時代中期	土壌状遺構, ピット群	細石刃, 縄文時代早期土器(前平式), 弥生時代土器(入来式), 石匙	
2000-2	桜ヶ丘団地H・I-8・9区(保健学科棟建設)	後期旧石器, 縄文時代早期, 弥生時代中期	旧石器時代陥穴, 弥生時代以降のピット	縄文時代早期土器(前平式), 弥生時代中期土器(入来式), 石皿, 剥片類	
2007-1	桜ヶ丘団地F・G-8区(中央診療棟新営その他工事)	後期旧石器時代, 縄文時代早期・晩期, 弥生時代	弥生時代の土坑	細石刃, 縄文時代早期土器(前平式・加栗山式・石坂式), 縄文時代晩期土器(黒川式), 弥生時代中期土器(入来式), 石皿, 石鏃, 剥片類, メノウ原石	
2008-1	桜ヶ丘団地F・G-10区(中央機械棟改修工事)	後期旧石器時代, 縄文時代早期, 弥生時代, 古代, 中世, 近世	近世以降の溝状遺構, ピット	細石刃, 縄文時代草創期土器片, 早期土器(岩本式・前平式), 弥生時代中期土器, 古代土師器, 中世陶器, 近世陶磁器, 石皿, 磨石, 敲石, 石鏃, 剥片類, 古銭	本書
2009-4	桜ヶ丘団地E・D-5～7区(新病棟建設)	後期旧石器時代, 縄文時代早期・後期・晩期, 弥生時代, 古代, 中世, 近世	旧石器時代陥穴状土坑, 集石, 縄文時代早期陥穴, ピット群, 弥生時代中期溝状遺構	小形ナイフ, 細石刃, 縄文時代早期土器片, 弥生時代中期土器, 古代土師器, 中世陶磁器, 近世陶磁器, 石皿, 磨石, 敲石, 石鏃, 剥片類	
2001-D (立会調査)	桜ヶ丘団地H・I-8・9区(保健学科新営その他工事)	弥生時代前中期, 古墳時代前期	弥生か古墳時代の竪穴建物か?	弥生土器, 古墳時代の土器(東原式)	鹿兒島大学埋蔵文化財調査室年報17

第2章 調査にいたる経緯

鹿児島大学では桜ヶ丘団地F・G区において中央機械棟改修工事が計画され、約250㎡が掘削範囲となった。工事地点の周辺である桜ヶ丘団地北部では、後期旧石器時代～縄文時代草創期・早期・晩期、弥生時代の土器・石器などが出土している。また、約10m東に近接する地点では、2007年度に汚水槽設置に伴う調査が行われており、縄文時代早期包含層以下が確認されている。このことから、同予定地内にも埋蔵文化財の包含が予想されたため、工事に先立ち発掘調査を実施することになった。

第3章 調査体制

調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が以下の体制と期間で行った。

所在地：鹿児島市桜ヶ丘8丁目35番1号

調査起因：中央機械棟改修工事

発掘期間：2008年6月9日～8月8日

調査面積：250㎡

発掘主体者：鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室長 新田栄治教授

発掘指導員：鹿児島大学埋蔵文化財調査室 主任 中村直子准教授・寒川朋枝特任助教

管理技師：国際航業株式会社 竹内眞哉

調査員：国際航業株式会社 土岐耕司

作業員：国際航業株式会社 鹿倉征治・加治屋幸雄・上塩入久代・上拾石達雄・上拾石きよ子・川口永流・川越まゆみ・川俣友秀・桐木平雅代・柴田恵子・下田まき子・新海芳美・園山トミエ・粒崎幸蔵・徳田幸一・中村学・

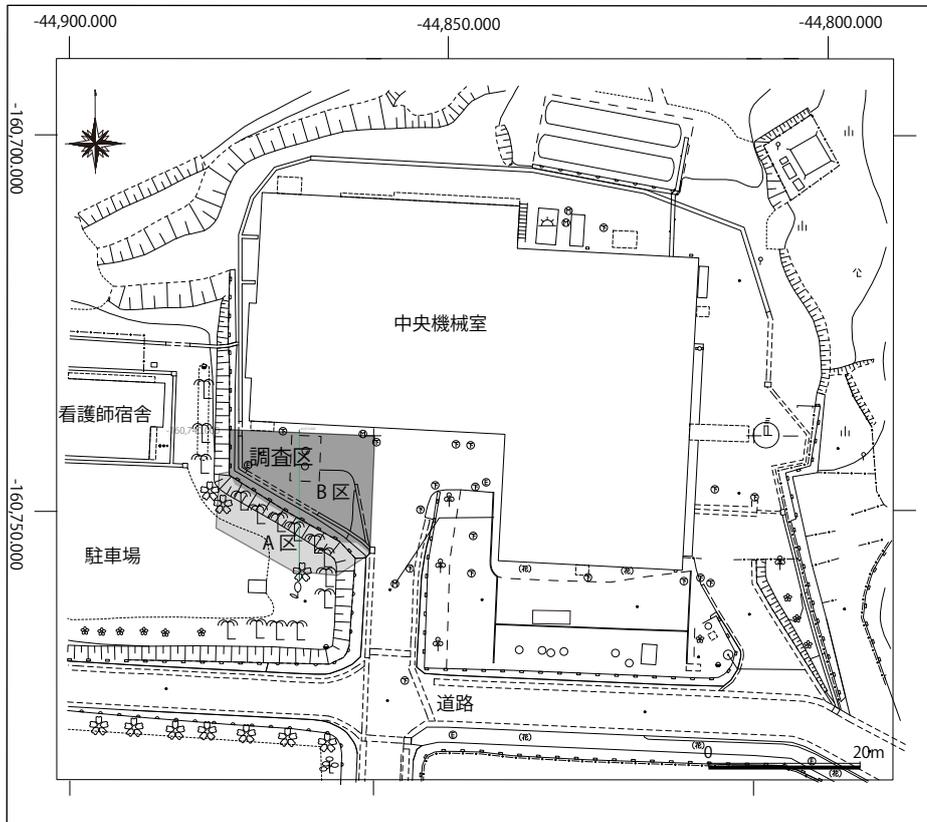


Fig. 3 調査区の位置 S=1/500

山口雄幸・畠田正裕・矢住純子・脇秋江・脇春教・脇満則（五十音順）

第4章 発掘調査の経過

調査に先立ち、調査区南側の擁壁と舗装・表土を重機によって除去した。調査区擁壁部分より南側は一段高く、その部分をA区、低い北側をB区とした（Fig. 3）。A区南西部においては2層からプライマリーな層が残存しており、B区では表土直下には6層（薩摩火山灰層、Sz-S）を確認した。B区数か所で薩摩火山灰層を掘削したところ、調査区の北東部に向かって7層（チョコ層）検出面が傾斜していることが分かった。

まずA区の1層から6層（薩摩火山灰層）上面まで、人力による掘削作業を行った。1・2層は近現代の造成土・畑土であり、2層からは陶磁器などが出土した。A区中央部には南北方向に走る段があり、東側が低かった。2層出土遺物はA区上段（西側）・下段（東側）ごとに取り上げた。また、3・4層上面では溝状遺構が検出された。3層は柔らかい黒色土、4層は喜界アカホヤテフラ（K-Ah）の層である。4層からは縄文時代早期の土器片が出土した。また、4～6層にかけて層位横転が随所にみられた。5層はパミスを含む黒色土で、縄文時代早期の土器が出土した。

A区・B区とも6層の薩摩火山灰層を重機で除去し、7層上面を検出した。7層は慎重にねじり鎌で掘削した。7a・7b層は調査区全面の調査を実施したが、過去の調査で遺物出土が稀であった7c・7d層は2mグリッドを設置した後、千鳥格子状に掘削を行った。7a層で土器小片、7c層で細石刃1点が出土したが、遺物が少なかったため、調査区の北東隅と西側に9層（始良Tn, AT）までの下層確認トレンチを2か所入れ、各層の土層サンプルを採取し、調査を終了した。7a～7d層について、放射性炭素年代測定を実施した（（株）加速器分析研究所、2010）。

第5章 基本層位（Fig. 4・PL 2～4）

基本層位としては、1層からAT上部の9層までを確認した。

1層：現代の畑・造成土である。シラス客土や砂利等も一部認められ、1970年代のキャンパス造成に伴うものであると推定される。

2層：近現代の畑・造成土である。地点によっては堆積



PL.1 遺跡見学会の様子（平成20年7月26日）



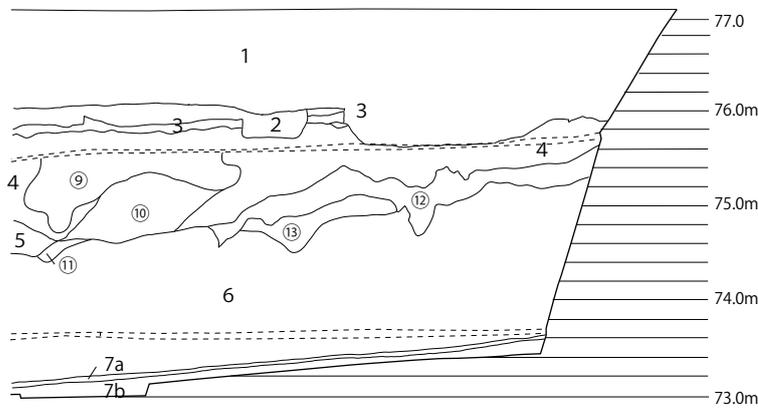
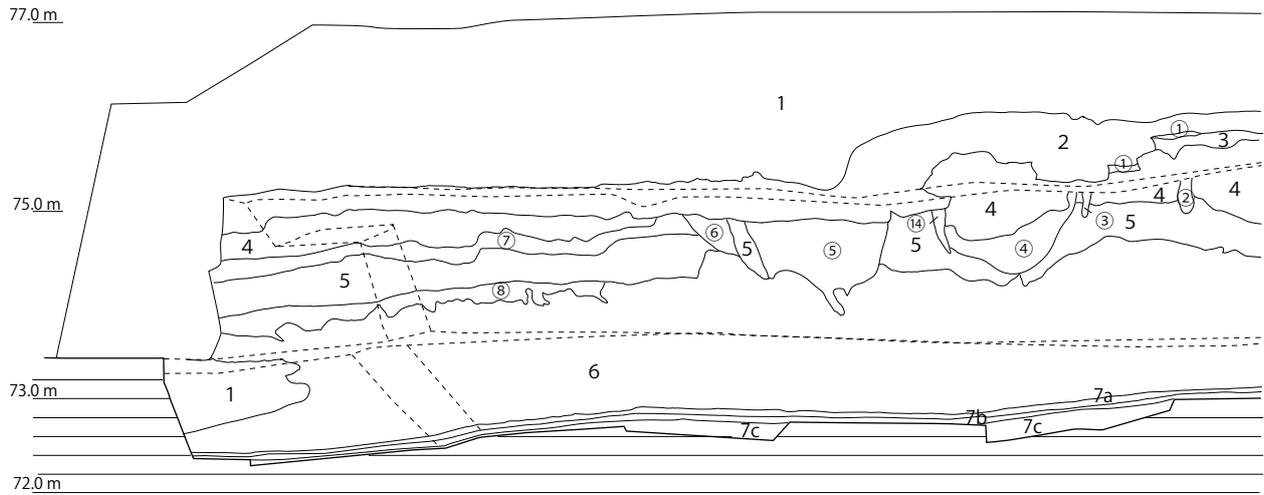
PL.2 南壁層位（北から）



PL.3 西壁層位（東から）

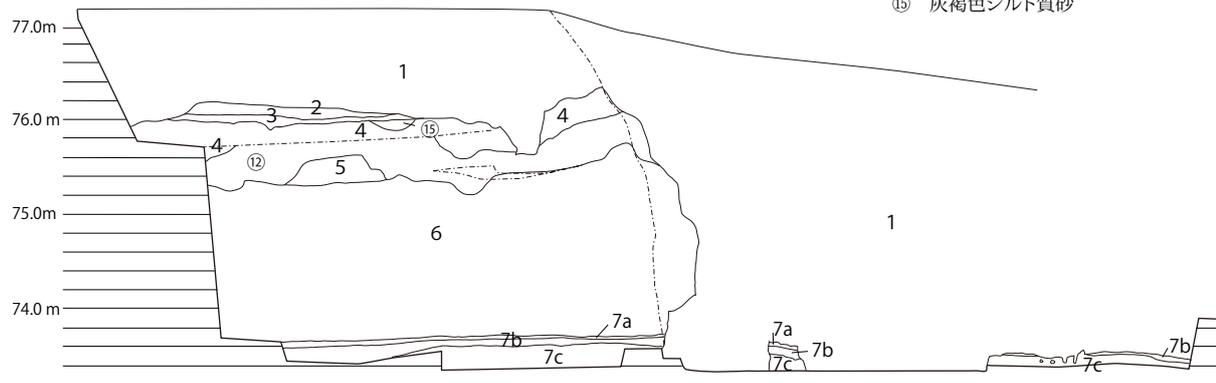


PL.4 深堀トレンチ2北壁（南から）

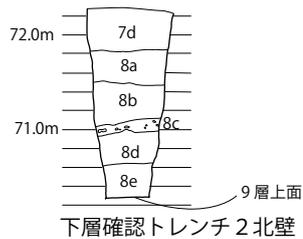


- ① 10YR5/1 褐灰色砂質シルト
- ② 10YR5/4 にぶい黄橙色シルト質砂(樹痕か)
- ③ ②に同じ
- ④ ⑦に類似
- ⑤ 7.5YR6/4 にぶい橙色～10YR6/4 にぶい黄橙色、砂質シルト、薩摩火山灰土混ざる
- ⑥ 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト質砂、薩摩火山灰土混ざる
- ⑦ 10YR4/1 褐灰色シルト質砂を基調とする。
- ⑧ 2.5Y4/1 黄灰色シルト質砂を基調とする。薩摩火山灰のパミス多い。
- ⑨ 2.5Y4/1 黄灰色シルト質砂を基調とする。薩摩火山灰のパミス多い。
- ⑩ 10YR6/2 灰黄褐色シルト質砂。薩摩火山灰のパミス多く含む。
- ⑪ 7.5YR7/4 (薩摩火山灰の一部) 砂質シルト。硬い。
- ⑫ ⑧に類似
- ⑬ 薩摩火山灰土と5層との混土
- ⑭ ②に同じ
- ⑮ 灰褐色シルト質砂

南壁層位断面図



西壁層位断面図



下層確認トレンチ2北壁

0 1:80 2m

Fig. 4 層位断面図 S=1/80

が非常に薄く、灰茶褐色を呈するシルト質砂である。

3層：黒色土シルト質砂。中世の遺物の他、縄文時代晩期～弥生時代の遺物が出土する。上面からは溝が3条検出された。

4層：茶褐色を基調とするシルト質砂。上部はやわらかい。鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）堆積層である。層位横転により4層以下が攪拌されている部分が多い。縄文時代早期の貝殻文系土器（岩本・前平式）が出土する。特に4層下部（灰茶褐色層）での出土量が多い。4層上面で溝が南東方向に1条（SD4）確認された。

5層：パミス混黒褐色土 縄文時代早期の包含層であり、土器・石器が出土しているが、4層下部に比べ量は少ない。この層も4層と同様、層位横転によって攪拌された部分が多い。

6層：薩摩火山灰（Sz-S）層 深いところでは1.5m堆積している。無遺物層であり、重機で掘削したところ、7層上面は調査区北東隅に向かって緩やかに傾斜していた。

7層：茶褐色粘土層 通称「チョコ層」と呼ばれている層で、後期旧石器時代末～縄文時代草創期の石器・土器が出土する。7a層～7d層まで4つに細分した。

7a層：黒色シルト、硬くしまる。

7b層：黒褐色シルト、粘質である。7a・b層土壌を試料とした放射性炭素年代測定では、11,480BC-11,281BC（2σ）という年代が得られた。

7c層：黒褐色シルト、粘質があまりなく、さくさくしている。7c層中炭化物を試料とした放射性炭素年代測定では、12,928BC-12,235BC（2σ）という年代が得られた。

7d層：褐色シルト。7d層土壌を試料とした放射性炭素年代測定では、13,500BC - 12,992BC（2σ）という年代が得られた。

8層：暗茶～茶黄褐色粘質・硬質土 8層中、幅10cm帯状に黄色パミス含む（Fig.4 8c層）。桜島・高峠6火山灰（Sz-TK 6（P17））か。

9層：始良丹沢火山灰（AT）



PL.5 表土除去後全景（東から）

第6章 各層の成果

第1節 1層出土遺物

遺物は、近現代の遺物（ガラス瓶、陶磁器類等）が出土し、その一部は1970年代半ばのキャンパス造成に伴うものと思われる。その他、中世陶器、古銭、縄文土器・弥生土器、石鏃など先史時代の遺物が出土している。これらは、下層から出土する遺物の傾向と一致しているため、もともとは近隣に埋没していたものと思われる。

Tab. 2 1層・カクラン出土遺物観察表（1）

No.	種別	器種	部位	区	層	取上No.	色調	胎土	調整	備考
1	陶器	播鉢?	口縁部	A	カクラン	-	内外面：5YR6/6 橙		外面：ナデ(-), 内面：摩滅	備前焼かにより不明

Tab. 3 1層・カクラン出土遺物観察表（2）

No.	種別	器種	区	層	取上No.	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	備考
3	金属製品	古銭	A	カクラン	-	2.2+ α	1.7+ α	-	1.04	「寛永通宝」か
2	石器	軽石製品	A	カクラン	-	9.0	6.0	1.9	25	表面に「メ」線刻あり

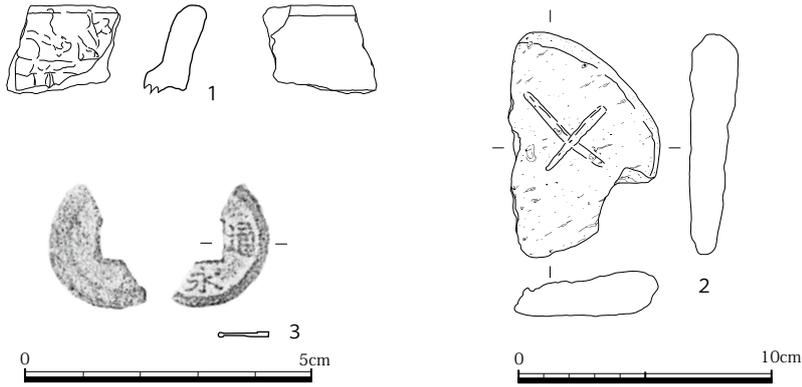


Fig. 5 1層・カクラン出土遺物 1・2 : S=1/3, 3 : S= 3/4



PL.6 1層・カクラン出土遺物

1層およびカクラン部出土遺物のうち、実測可能なものを図示した（Fig. 5, PL. 6, Tab. 2・3）

1は陶器の口縁部である。くの字状に屈曲し、口唇部は丸く仕上げる。内面には、ユビオサエの跡が認められる。釉はかかっていないが、硬く焼きしまっている。2は軽石加工品である。表面に「メ」状の線刻が認められる。3は、古銭である。半分を欠損しているが「寛永通宝」であると推定される。

第2節 2層の成果

(1) 2層上面検出状況（Fig. 6, PL. 5）

2層土は、A区でのみ残存していた。2層上面で、南北方向に走る比高差約60cmの段が確認された。西側が高く、東側が低い。また、溝状のカクランがあり、擁壁やその基礎部のカクラン（B区）と並行であることから、桜ヶ丘団地造成時のものであると推定される。

(2) 2層出土遺物 (Fig. 7, PL. 7, Tab. 4・5)

出土遺物としては、陶磁器類、弥生土器の甕、縄文時代晩期と思われる胴部土器片、石鏃、磨石、石皿片などが出土している。

4～6は近世磁器で、5・6は肥前焼である。7～14は陶器だが、7・13が苗代川焼、10が龍門司焼、11が加治木・始良系で薩摩地方の近世陶器が多い。器種は、鉢・播鉢・皿・香炉・土瓶・山茶花と日用雑器がほとんどである。

15・16は弥生土器もしくはその可能性が高い土器片である。どちらも壺の破片で、小片のため型式は不明である。17・18は縄文時代早期土器の深鉢口縁部である。17は端部が平坦な口縁部で、やや開きながら直立する器形を呈する。外面上部に貝殻復縁による4条の刺突文を横位に施している。器面調整は外面に貝殻条痕が認められるが、ナデを施している。口縁部がやや直立気味だが、倉園B式である。18は口縁部で、外面上部貝殻復縁による1段の刺突文を、器面は横方向の貝殻条痕を施したもので前平式である。19・20は打製石鏃である。2点とも下端部を1か所欠損しているが、下面に挟りが入る形態を呈する。

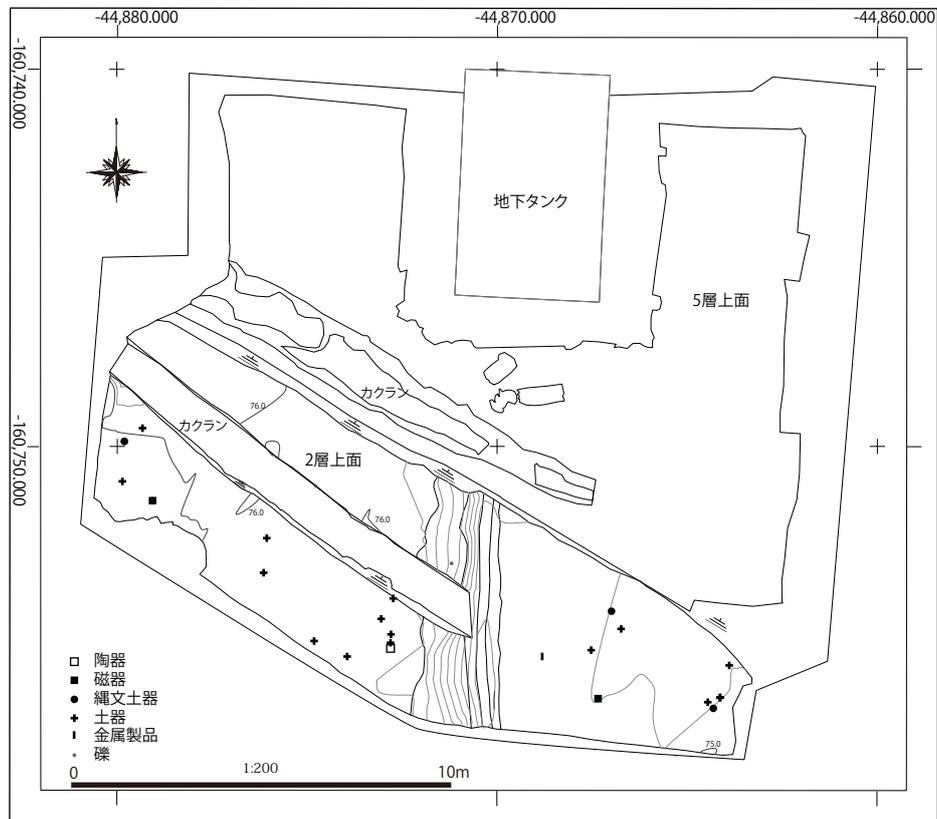


Fig. 6 表土除去後平面図と2層上面遺物出土状況 S = 1 / 200

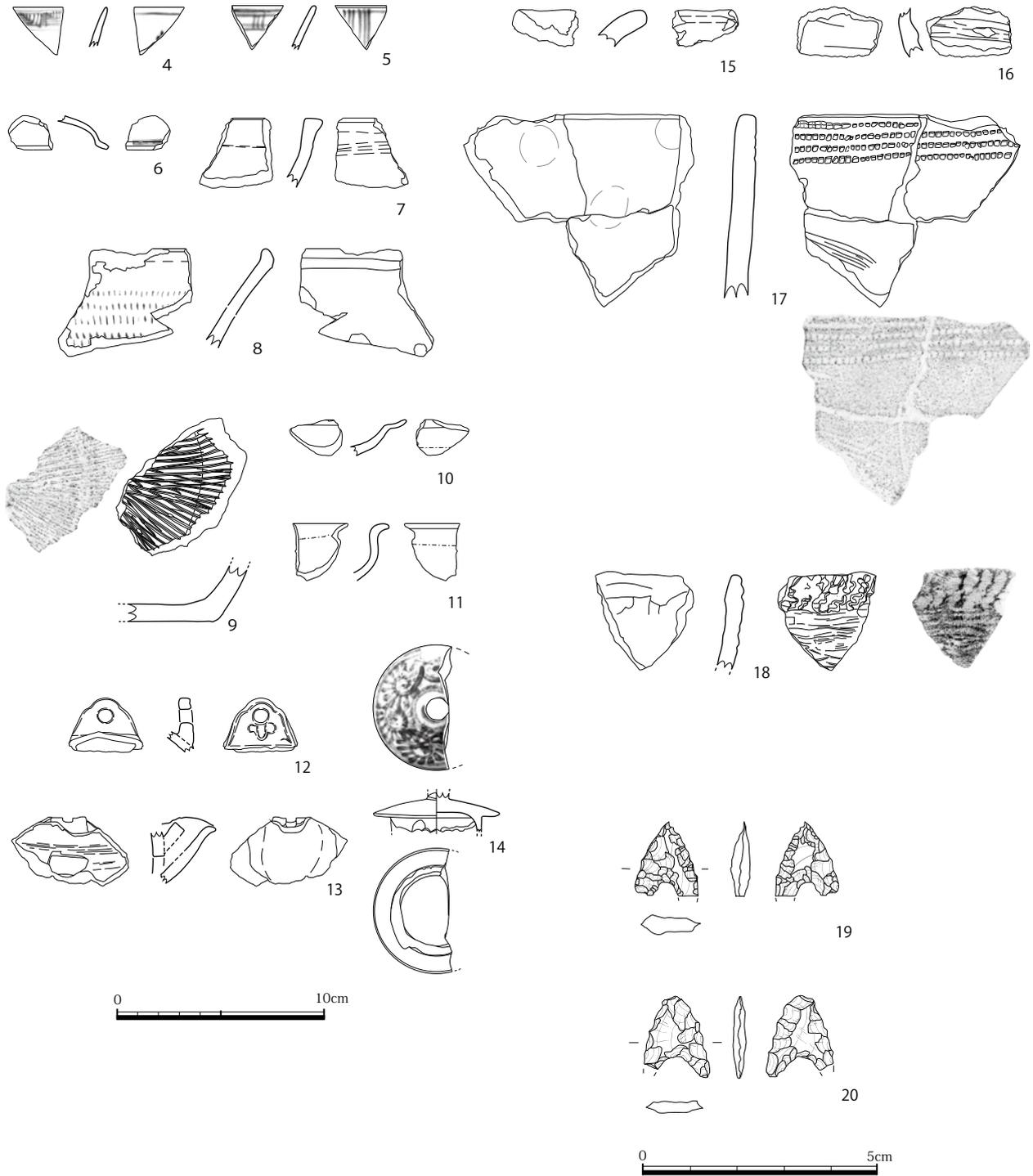
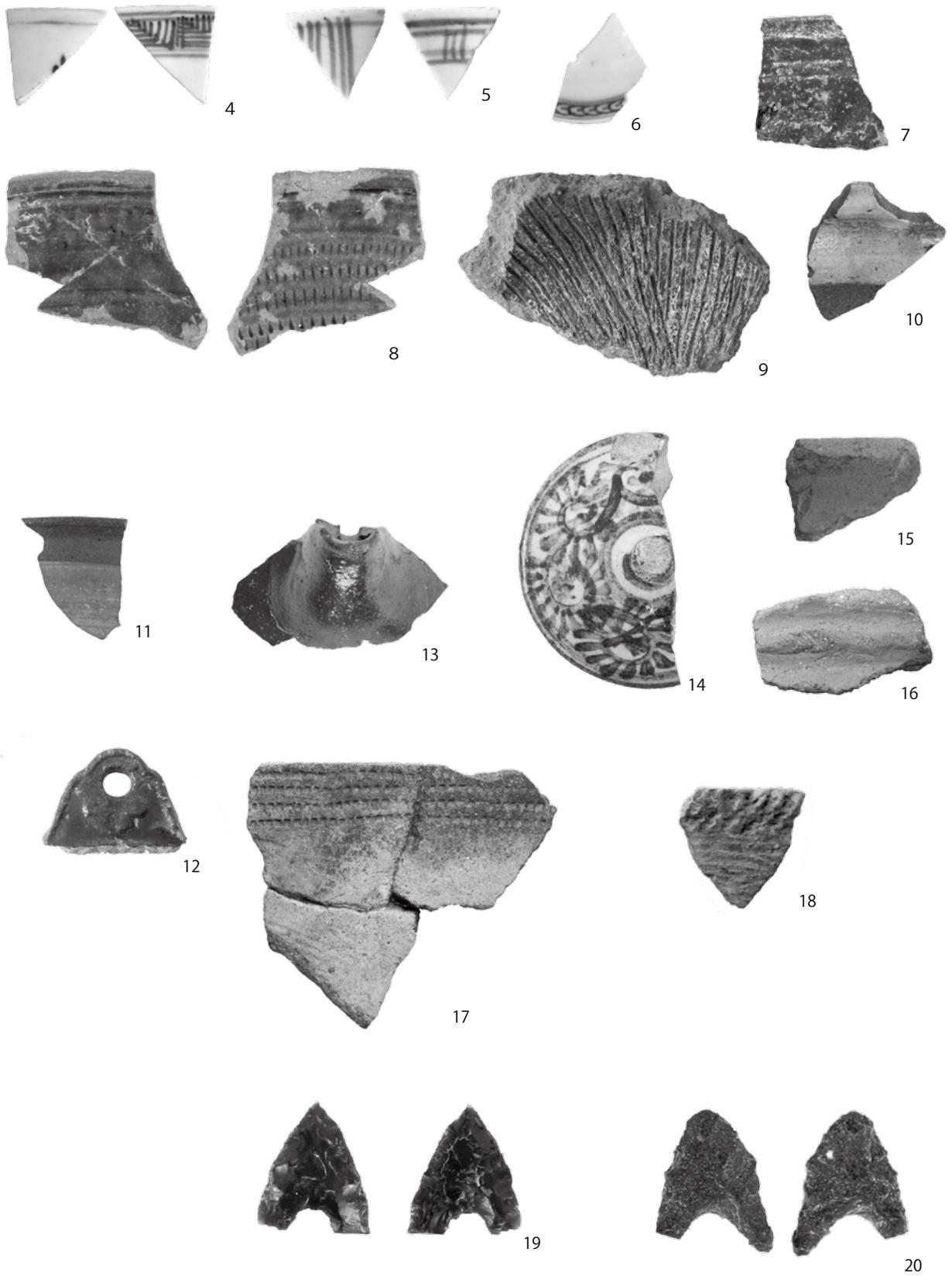


Fig.7 2層出土遺物 4~18 : S=1/3, 19・20 : S=3/4



PL.7 2層出土遺物

Tab. 4 2層出土遺物観察表(1)

No.	種別	器種	部位	区	層	取上No.	色調	胎土	調整・施文	備考
4	染付	碗か蓋	口縁部	A区上	2	—	釉調:透明釉, 胎土:白色		内外面施釉, 呉須による施文	肥前焼
5	磁器	磁器	口縁部	A区上	2	—	釉調:透明釉, 胎土:白色		内外面施釉, 呉須による施文	肥前焼か
6	磁器	急須の蓋	端部	A区上	2	—	釉調:透明釉, 胎土:白色		裾部内面のみ無釉, 外面呉須による施文	肥前焼, 胴部に孔有り
7	陶器	鉢	口縁部	A区上	2	—	釉調:10YR3/3 暗褐の不透明釉, 胎土:10YR6/2 灰黄褐		回転ナデ, 内外面施釉, 面沈線	苗代川焼
8	陶器	鉢	口縁部	A区上	2	—	釉調:5Y4/3 暗オリーブの透明釉, 胎土:2.5Y6/1 黄灰		回転ナデ, 内外面施釉, 内面:とびカンナ	
9	陶器	播鉢	底部	A区上	2	—	釉調:5Y4/2 灰オリーブの不透明釉, 胎土:5YR5/3 にぶい赤褐		回転ナデ?, 外面施釉, 内面:カキメ	
10	陶器	皿	口縁部	A区上	2	—	釉調:透明釉, 化粧土:2.5Y8/2 灰白, 胎土:10YR5/3 にぶい黄褐		回転ナデ, 内外面施釉, 口縁部外面~内面に化粧土	龍門司焼, 18C後半以降
11	陶器	香炉	口縁部	A区上	2	—	釉調:10YR4/4 褐の不透明釉, 胎土:10R5/6 赤		回転ナデ, 口縁部のみ施釉	加治木・始良系?
12	陶器	土瓶	把手	A区上	2	—	釉調:5YR2/2 黒褐の不透明釉, 胎土:10YR7/3 にぶい黄橙		内外面施釉, 外面:型成形による文様	堅野焼?, 18C後半以降, 型成形
13	陶器	山茶花	注口部	A区上	2	—	釉調:10YR2/3 黒褐の不透明釉, 胎土:2.5YR5/4 にぶい赤褐		内面回転ナデ, 注口部ユビオサエ, 内外面施釉	苗代川焼, 19C以降
14	陶器	土瓶蓋	胴部		2	198	釉調:透明釉, 胎土:2.5Y8/3 浅黄		回転ナデ, ケズリ, 裾部外面のみ無釉, 外面:呉須による施文	最大径6.1cm, 堅野か苗代川, 18C以降, スンコロクの写し
15	弥生	壺	口縁部	A区上	2	—	内外面:H7.5Y6/4 にぶい橙	石英, 白色粒子, 角閃石, 赤色粒子を含み, やや粗い	内外面:ナデ(—)	
16	弥生か?	壺	肩部	A区上	2	—	外面:7.5YR6/4 にぶい橙類似, 内面:10YR7/4 にぶい黄橙	石英, 白色粒子, 金雲母を含み, やや粗い	外面:ミガキ(—), 内面:摩滅により不明	突帯貼付け
17	縄文	深鉢	口縁部	A区上	2	—	外面:10YR6/4 にぶい黄橙~10YR3/2 黒褐, 内面:10YR6/4 にぶい黄橙	石英, 白色粒子, 角閃石を含み, やや粗い	外面:ナデ(—), 横位の貝殻刺突文, 内面:ナデ(—)	No.44と同一個体か, 倉園B式
18	縄文	深鉢	口縁部	A区下	2	—	外面:10YR5/3 にぶい黄褐, 内面:7.5YR6/4 にぶい橙	白色粒子, 石英, 角閃石を含み, ややきめ細かい	外面:貝殻条痕(—), 貝殻刺突文, 内面:ナデ(—), ユビオサエ	断面一部黒色, 前平式

Tab. 5 2層出土遺物観察表(2)

No.	種別	器種	区	層	取上No.	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	備考
19	剥片石器	打製石鏃	A区上	2	—	1.6	1.4	0.4	0.63	黒曜石(腰岳類似)
20	剥片石器	打製石鏃	A区上	2	—	1.7	1.4	0.3	0.49	頁岩

第3節 3層の成果

(1) 3層上面検出遺構と遺構出土遺物 (Fig. 8, PL. 8~11, Tab. 6・7)

3層上面からは溝状遺構3条を検出した。

SD1

A区南西部段に並行して南北方向に走る。底面にはいくつかの段があり、幅約50cmの2,3条の溝が重なり合った結果であると推定される。ただし、埋土断面観察を行ったが、分層はできなかった。

出土遺物 (Fig. 9, PL.11)

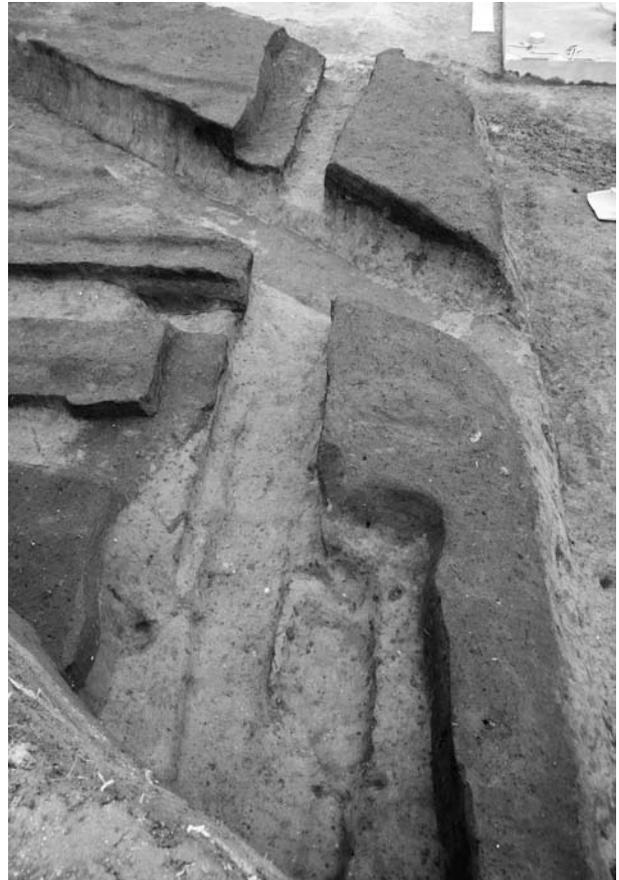
SD1からは、陶器、磁器、弥生土器、縄文土器が出土しているが、図示できたのはFig.9-21・22である。21は、磁器の皿である。薄手作りで内外面とも呉須による文様が施されている。いわゆる芙蓉手といわれるタイプで、器壁は薄い。近世初期の中国産磁器と推定される。22は弥生土器の口縁部である。端部がヨコナデによって少しくぼんでおり、広口になることから、弥生時代中期前半の入来Ⅱ式の甕であると推定される。



PL.8 SD1～SD3 検出状況 (北から)



PL.9 SD1～SD3 完掘 (東から)



PL.10 SD1 完掘状況 (南から)

Tab. 6 3層上面検出遺構一覧

遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	埋土	遺物	備考
SD 1	溝	672+ α	152	96	2層に類似	陶器, 磁器, 縄文土器, 土器片	方向 NS
SD 2	溝	320	52	32	2層土を基調とし, 4層土ブロックを含む。	縄文土器, 土器片	方向 EW
SD 3	溝	184	52	36	2層土を基調とし, 4層土ブロックを含む。	-	方向 EW

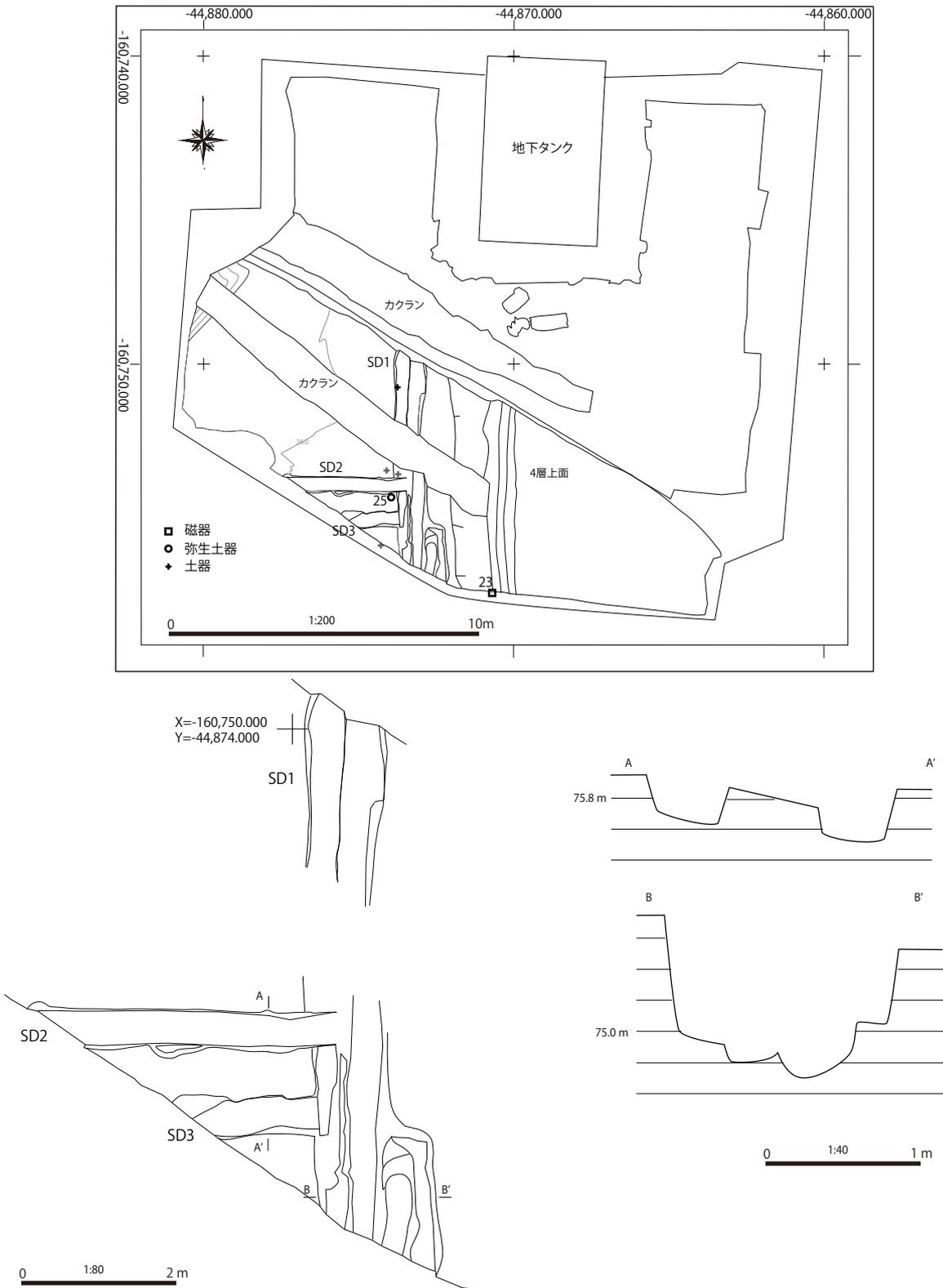


Fig. 8 3層上面検出遺構



Fig. 9 SD1 出土遺物 S= 1 / 3

PL.11 SD1 出土遺物

Tab. 7 SD1 出土遺物観察表

No.	種別	器種	部位	区	層位	取上No.	色調	胎土	調整	備考
21	磁器	皿	口縁部	SD1	2層	-	釉調：透明釉 胎土：白色		内外面施釉，具須による施文	中国産か，16～17C，芙蓉手
22	弥生	甕	口縁部	SD1 北側			内外面：7.5YR6/4 にぶい橙	白色粒子，石英，角閃石を含み，やや粗い	内外面：ナデ（－）	入来Ⅱ式

SD2

A 区上段南側に位置する。幅約 50cm で深さ 30cm 程を測る。底面は平坦で，断面形は台形状である。埋土中から，縄文土器小片が出土している。SD 3 と並行し，SD 1 の西側に接する。埋土が類似しており，新旧関係は不明である。

SD3

SD2 と並行し，SD 1 の西側に接する。埋土が類似しており，新旧関係は不明である。幅約 50cm で深さ 30cm を測る。底面は平坦で，断面形は台形状である。遺物の出土はなかった。

(2) 3層出土遺物 (Fig.10, PL. 12, Tab. 8)

近世陶器・備前焼・弥生土器・縄文土器が出土している。層厚が薄いこともあり，出土遺物も少ない。図示できたのは 3 点である。

23 は苗代川焼陶器播鉢の口縁部である。24 は備前焼播鉢の底部である。櫛目は 6 + α 条が一単位となっている。櫛目単位の間隔は広い。体部が若干ゆがんでおり，器面にはゆるやかな凹凸が認められる。25 は弥生時代中期甕の口縁部である。口縁端部は欠損しているが，残存部にヨコナデによる凹線状のくぼみが認められ，入来Ⅱ式である。

Tab. 8 3層出土遺物観察表

No.	種別	器種	部位	区	層	取上No.	色調	胎土	調整	備考
23	陶器	播鉢	口縁部	A	3層	468	外面：7.5YR6/4 にぶい橙，内面：10YR6/4 にぶい黄橙		回転ナデ，内外面施釉，口縁部上面無釉	苗代川焼，18C 後半以降
24	陶器	播鉢	胴部～底部	A	3層 上面	-	外面：5YR5/3 にぶい赤褐，内面：10YR5/1 褐灰～5YR5/3 にぶい赤褐		回転ナデ，ユビオサエ，底部付近ケズリ（－），内面：カキメ	備前焼
25	弥生	甕	口縁部	A	3層	33	外面：7.5YR6/4 にぶい橙，内面：10YR6/4 にぶい黄橙	白色粒子，石英，赤色粒子を含み，やや粗い	内外面：ナデ（－）	入来Ⅱ式

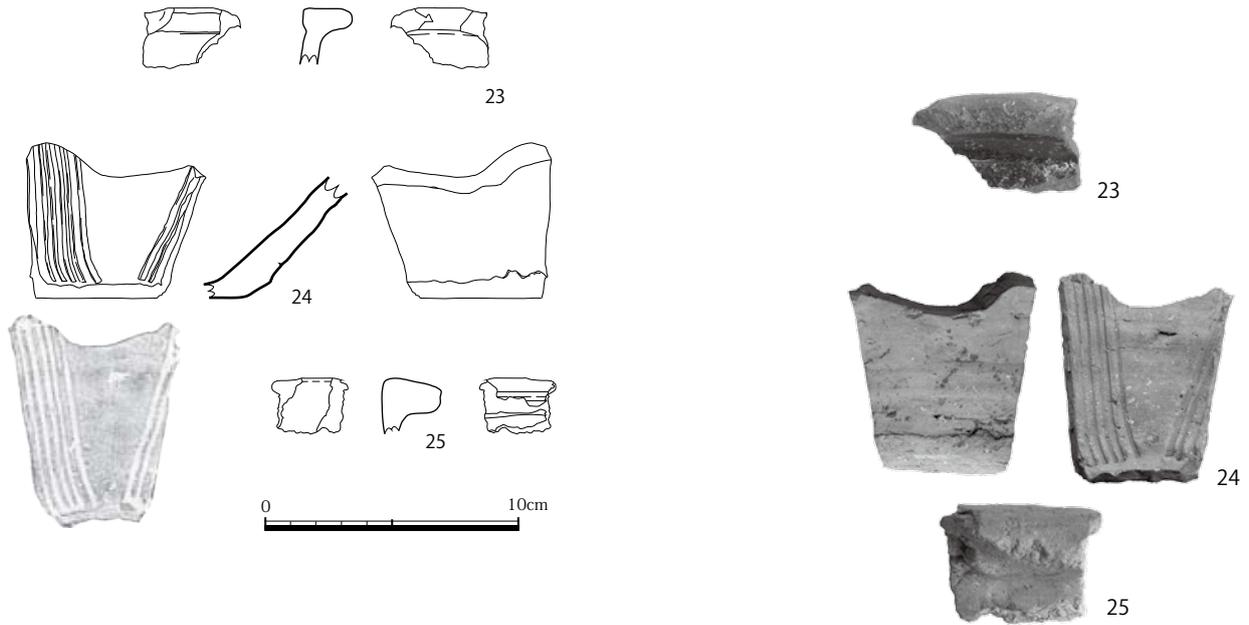


Fig. 10 3層出土遺物 S=1/3

PL.12 3層出土遺物

第4節 4層の成果

(1) 4層上面検出遺構 (Fig.11, PL. 13～19, Tab.9)

溝状遺構1条とピット4基が検出された。4層以下は層位横転のため攪拌されている部分が多く、4層上面から4層中において、5層・6層土やそれらとの混土が带状や馬蹄状の平面形で認められた。4層上面検出遺構は、層位横転を掘削して形成されている。埋土も2・3層土に類似することから、2・3層に近い時期のものであると推定される。

SD 4

A区南西部、わずかに弧状を呈しながら南北方向に走る。カクラン部やSD1に切られており、東端はA区中央部の段までである。幅40cm前後、深さは約10cmである。埋土は、一部、二つの層に分かれる。底面は平たいが、西端部は丸く途切れる。

P1～P4

A区西側にピットを4基検出した。P1は、SD4を切っている。P2の平面形は楕円状だが、その他はほぼ円形で、直径25cmほどである。深さは15～40cmとばらつきがあり、特に並びのみられる配置ではない。遺構出土遺物はなかった。

(2) 4層出土遺物 (Fig.12～15, PL. 20～22, Tab.10～12)

遺物は縄文土器が多く、中でも縄文時代早期の貝殻文系土器が多く出土した。その他、磨石・敲石、石斧、石皿、フレイクなど石器関連遺物などが出土している。出土遺物は、層位横転中の4層とそれ以外とを区別して取り上げたが、出土傾向は両者ともあまり変わらなかった。

ただし層位横転内4層からは、被熱した礫が集中して出土した (Fig.12 遺物No.56 分布付近)。これらは他の礫と共に並んだように出土している (PL.26)。それが下部にも続くことから、土層が横転する際土が崩れて、生じた隙間に転げ落ちたものではないかと推定している。4層中の被熱礫が集中した場所では、それより下の5層からも被熱礫と礫が集中して出土している (2トレンチ南壁付近)。

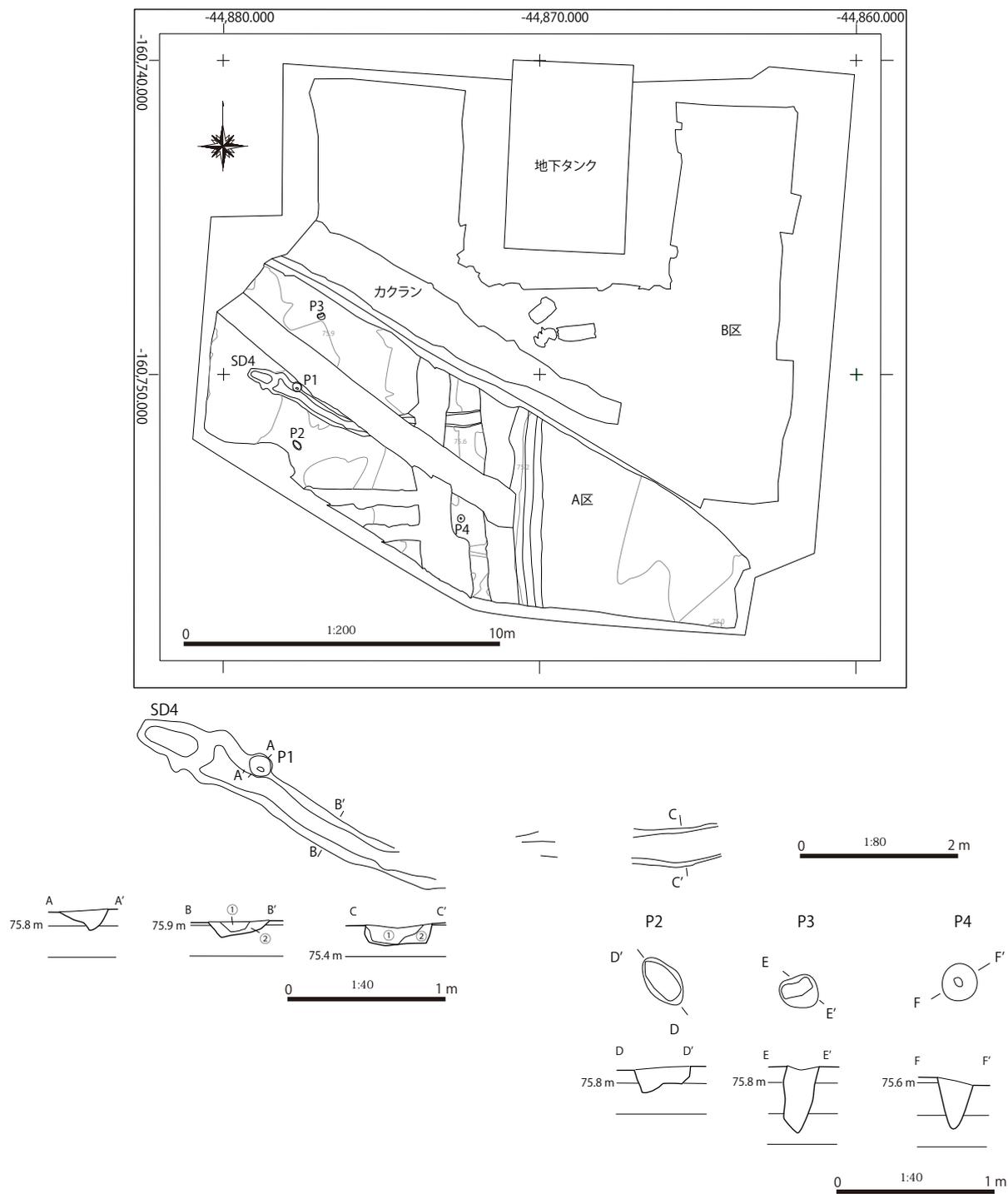


Fig. 11 4層上面検出遺構



Fig. 12 4層遺物出土状況 S=1/100

Tab. 9 4層上面検出遺構一覧表

遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	埋土	遺物	備考
SD 4	溝	440+ α	42	13	①暗灰褐色シルト質砂、しまっている。②カホヤとの混土。	-	P1に切られる、EW方向(弧状)
P1	ピット	32	-	13	黒褐色土シルト質砂に3層土混ざる。しまっている。	-	SD4を切る
P2	ピット	36	22	16	10YR2/3にぶい黄褐色シルト質砂。しまっている。	-	
P3	ピット	22	-	44	10YR3/3 暗褐色シルト質砂。しまっている。	-	
P4	ピット	23	-	34	10YR3/3 暗褐色知ると質砂。	-	



PL.13 4層上面遺構検出状況（北から）



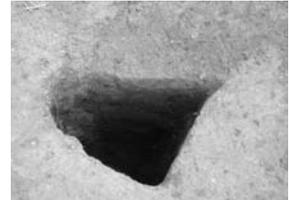
PL.14 SD4 埋土断面（東から）



PL.15 SD4 完掘（西から）



PL.16 P2 埋土断面（東から）



PL.17 P3 埋土断面（東から）



PL.18 A区下段層位横転（北から）



PL.19 4層上面遺構完掘（北から）

26～43は縄文時代早期の深鉢形土器の口縁部である。口縁部端部に縦位の刺突文を施し、それ以下は貝殻条痕によって器面調整されている。外面は横位の貝殻条痕が、内面は斜位もしくは横位の貝殻条痕を施した後、ナデ調整が施されているものもある。このうち、26～35には口縁部上面と外面2段に貝殻復縁による刺突文を施されている。26～29の口縁部上面の刺突文は太くシャープで、外面に施された刺突文とは施文具が異なっている。上面の刺突はやや内面の方向から施され、口縁部断面形は上面が内側を向いている。また、26は内面に明瞭な稜線を持つ。30～34は口縁部上面・外面とも同一の施文具で刺突文を施しており、上面の刺突もやや外面方向から施されているので、口縁部上面が外面方向を向く。34は内面口縁部直下にヘラ描きによる二条の沈線文が施されている。36～43は外面に一条の刺突文を施すものである。33・36は角筒土器の可能性がある。

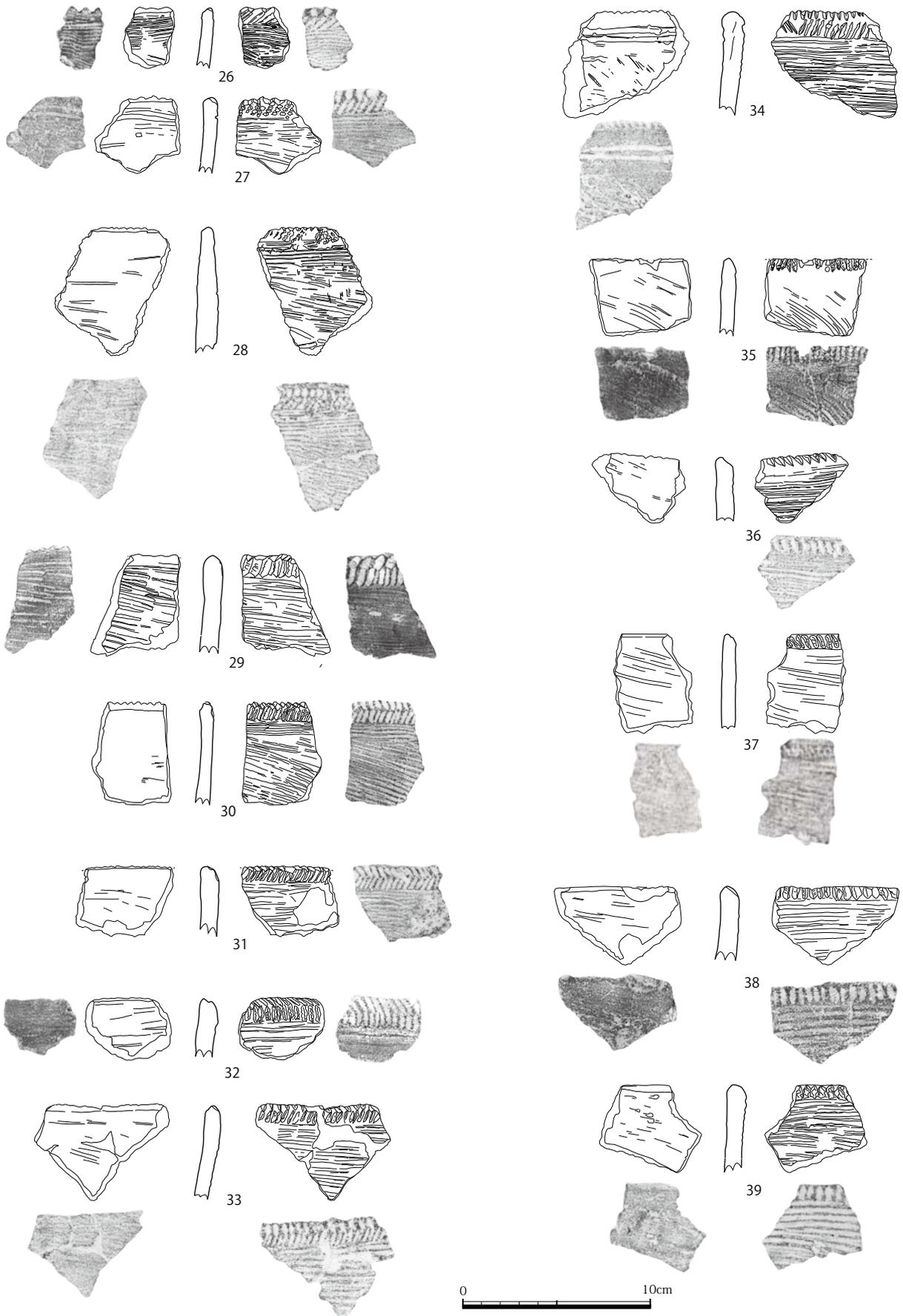


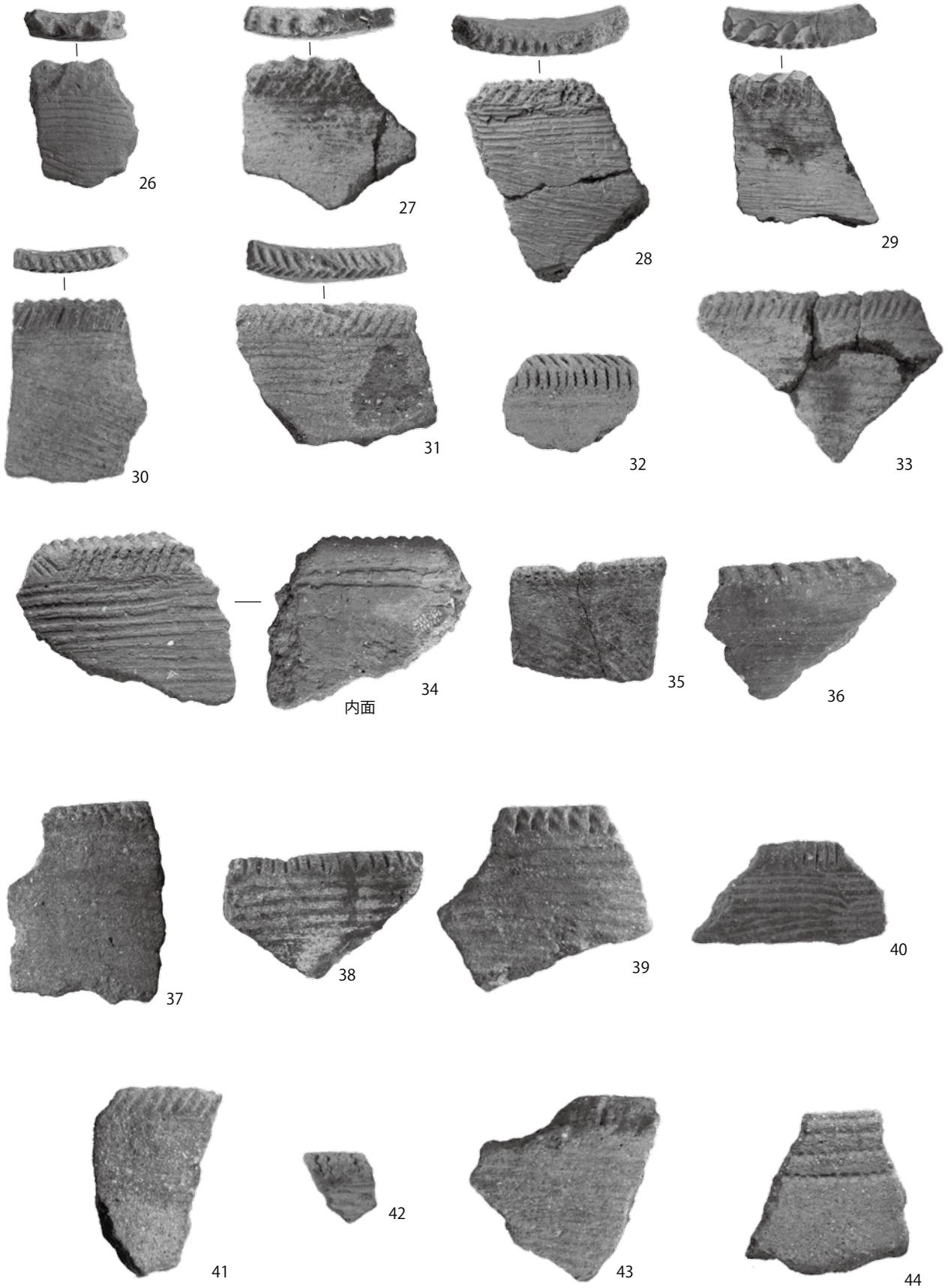
Fig. 13 4層出土遺物(1) S=1/3



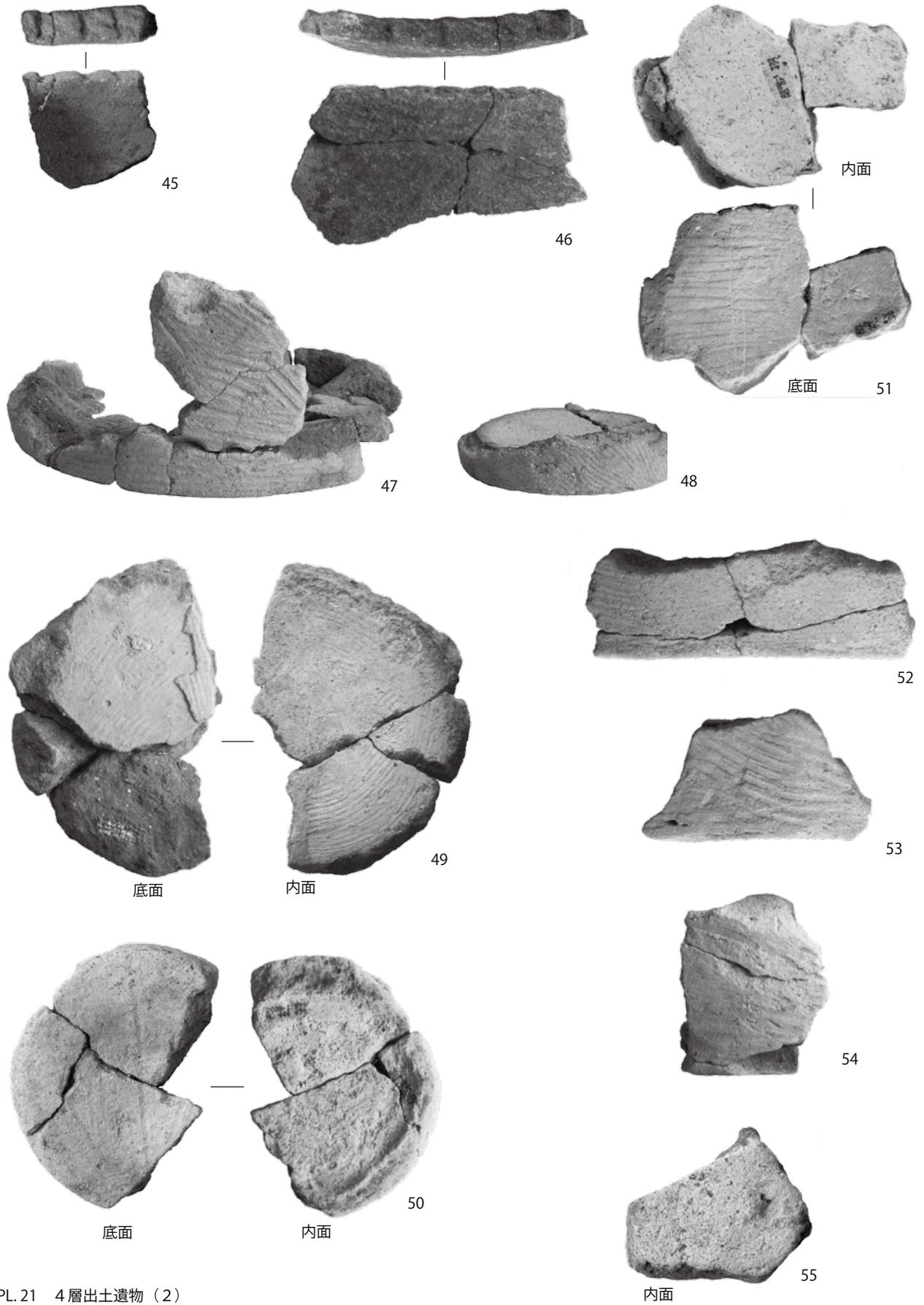
Fig. 14 4層出土遺物(2) S=1/3



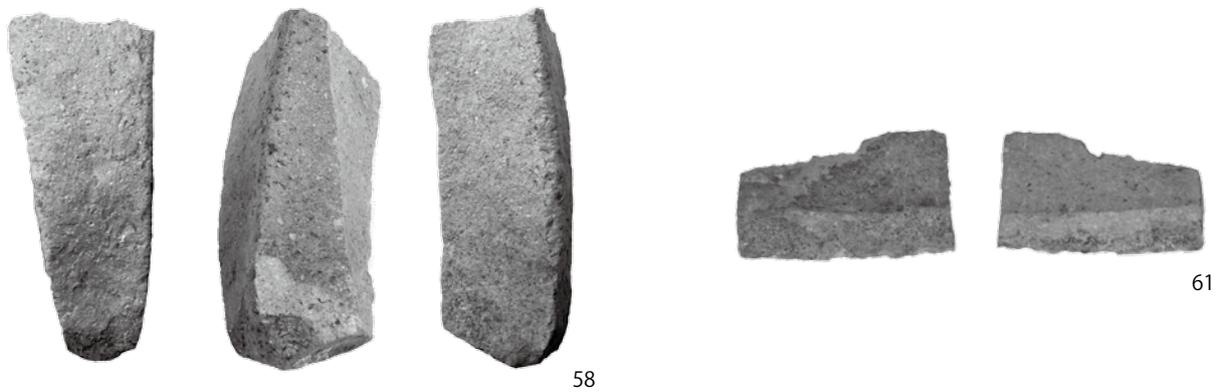
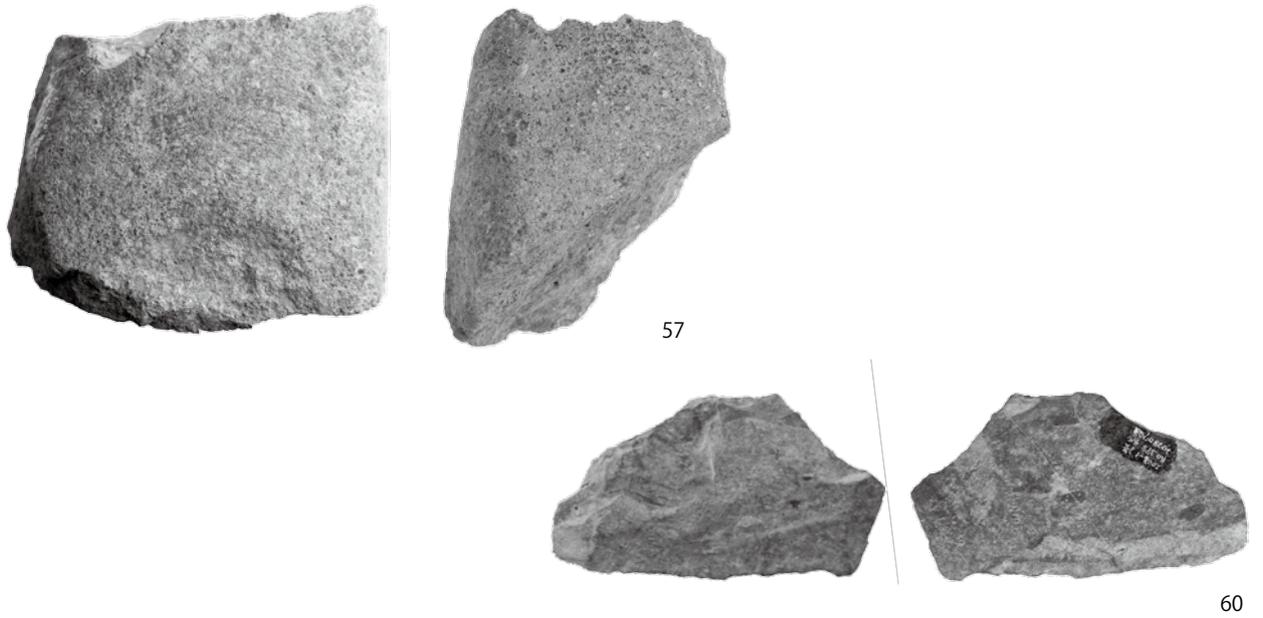
Fig.15 4層出土遺物(3) S=1/3



PL. 20 4層出土遺物(1)



PL.21 4層出土遺物(2)



PL.22 4層出土遺物(3)

Tab.10 4層出土遺物観察表(1)

No.	種別	器種	部位	区	層	取上 No.	色調	胎土	調整・施文	備考
26	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	279	外面:10YR6/3にぶい黄橙, 10YR6/4にぶい黄橙	石英, 白色粒子, 角閃 石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―), (\\), 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕 (―)	岩本式
27	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	54	内外面:10YR7/4にぶい黄 橙, 器肉:5Y3/1オリーブ 黒	白色粒子, 石英, 角閃 石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―), 貝殻 刺突文, 内面:貝殻条痕(―) →ナデ?	岩本式
28	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	317	内外面:10YR6/4にぶい 黄橙	白色粒子, 石英, 赤色 粒子, 黒色粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―), (\\), 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕 (―)→ナデ?	外面に粘土 を塗り重ねた ような痕跡, 岩本式
29	縄文	深鉢	口縁部	A	4層 横転	514	外面:10YR6/4にぶい黄 橙, 器肉:10YR2/1黒, 内面:10YR7/4にぶい黄橙 ~10YR2/1黒	石英, 白色粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―), 貝殻刺 突文, 内面:貝殻条痕(―)	岩本式
30	縄文	深鉢	口縁部	A	4層 横転	708	外面:7.5YR5/4にぶい褐 色類似, 内面:7.5YR5/3 にぶい褐類似	石英, 白色粒子, 角閃 石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―), (\\), 貝殻刺突文, 内面:ナデ(―)	ホケノ頭Ⅲ類
31	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	272	外面:10YR6/4にぶい黄 橙, 器肉:5Y2/1黒, 内面: 10YR7/4にぶい黄橙	石英, 白色粒子, 角閃 石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―), 貝殻刺 突文, 内面:ナデ(―)	ホケノ頭Ⅲ類
32	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	259	外面:7.5YR6/6橙類似, 器肉:3.5Y3/1黒褐, 内面: 7.5YR6/6橙	石英, 角閃石, 白色粒 子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―), 貝殻刺 突文, 内面:ナデ(―)	ホケノ頭Ⅲ類
33	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	391	内外面:10YR5/4にぶい 黄褐	白色粒子, 石英, 角閃 石, 赤色粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―), 貝殻 刺突文, 内面:貝殻条痕(―) →ナデ?	角筒か, 断 面一部黒色, ホケノ頭Ⅲ類
34	縄文	深鉢	口縁部	A	4層 横転	232	外面:5YR5/4にぶい赤 褐, 内面:5YR4/6赤褐~ 10YR6/4にぶい黄橙	白色粒子, 石英, 角閃石, 赤色粒子を含み, やや 粗い	外面:貝殻条痕(―), 貝殻刺 突文, 内面:下部ケズリ(\\), 上部ナデ(―), 2条の貝殻条 痕文	内面施文?, ホケノ頭Ⅲ類
35	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	110	外面:2.5Y5/2暗灰黄, 内 面:2.5Y7/3浅黄	石英, 白色粒子, 黒色 粒子, 赤色粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(\\)→(―), 貝殻刺突文, 内面:ケズリ(―) →(\\)	外面スス付 着, 前平式
36	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	56	外面:2.5YR5/6明赤褐 ~2.5Y3/2黒褐, 内面: 5YR4/6赤褐	白色粒子, 石英, 角閃 石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―) 貝殻刺 突文, 内面:ナデ(\\)	角筒か, 前 平式
37	縄文	深鉢	口縁部	A	4層 横転	251	内外面:2.5Y5/4黄褐	白色粒子, 石英, 角閃 石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―), 貝殻 刺突文, 内面:貝殻条痕(\\) →ナデ?	前平式
38	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	58	外面:2.5Y4/2暗灰黄, 内面: 2.5Y3/2黒褐	石英, 角閃石, 白色粒 子を含み, ややきめ細 かい	外面:貝殻条痕(―) 貝殻刺 突文, 内面:ナデ(\\)	前平式
39	縄文	深鉢	口縁部	A	4層 横転	625	外面:2.5Y3/1黒褐, 2.5Y4/2暗灰黄	石英, 白色粒子, 黒色 粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―) 貝殻刺 突文, 内面:ケズリ(\\)	前平式
40	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	405	外面:10YR4/3にぶい黄褐, 内面:7.5YR5/4にぶい褐	白色粒子, 石英, 角閃 石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―), 貝殻刺 突文, 内面:ケズリ(―)→ミ ガキ(―)	前平式
41	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	276	外面:2.5Y6/3にぶい黄 ~2.5Y5/3黄褐, 内面: 10YR6/4にぶい黄橙類似	白色粒子, 石英, 角閃 石を含み, やや粗い	外面:貝殻刺突文, 調整は摩 滅により不明, 内面:摩擦に より不明	器表面摩擦, 前平式
42	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	82	外面:10YR6/4にぶい黄 橙類似, 内面:10YR6/4に ぶい黄橙類似	石英, 白色粒子, 黒色 粒子, 赤色粒子を含み, ややきめ細かい	外面:貝殻条痕(―) 貝殻刺 突文, 内面:ナデ(―)	前平式
43	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	575	内外面10YR5/3にぶい黄 褐, 器肉:2.5Y3/1黒褐	白色粒子, 石英, 角閃 石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(―), 貝殻刺 突文, 内面:貝殻条痕(―)	前平式
44	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	193	内外面:10YR6/4にぶい 黄橙	白色粒子, 石英, 角閃 石を含み, やや粗い	外面:ナデ(―) 貝殻刺突文, 内面:ナデ?	No.17と同一 個体?, 倉園 B式
45	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	145	内外面:5YR4/4にぶい 赤褐~5Y2/1黒, 器肉: 5Y2/1黒	白色粒子, 透明粒子を 含み, ややきめ細かい	外面:貝殻条痕(―) 口唇部 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕 (―) ユビオサエ	焼成不良, 外 面スス付着
46	縄文	深鉢	口縁部	A	4層	161	外面:10YR6/4にぶい黄 橙類似, 内面:10YR6/4に ぶい黄橙類似	石英, 白色粒子, 角閃 石を含み, ややきめ細 かい	外面:貝殻条痕(\\)→ユビ オサエ, 口唇部:刺突文, 内面: 貝殻条痕(―)→ユビオサエ	焼成不良, 外 面スス付着

Tab.11 4層出土遺物観察表(2)

No.	種別	器種	部位	区	層	取上No.	色調	胎土	調整・施文	備考
47	縄文	深鉢	胴部～ 底部	A	4層 5層	40	外面：10YR6/4 にぶい黄 橙～7.5YR6/4 にぶい橙、 内面：10YR6/3 にぶい黄 橙～2.5Y2/1 黒	白色粒子、石英、角閃 石を含み、やや粗い	外面：貝殻条痕(―)、(＼)、 底部外面：ナデ(―)→ミガキ (―)、内面：貝殻条痕(／)	
						41				
						352				
						354				
						372				
373										
637										
48	縄文	深鉢	底部	A	4層 5層 横転	169	外面：10YR5/4 にぶい黄 褐、器肉：5YR5/6 明赤褐、 内面：10YR6/4 にぶい黄 橙	白色粒子、石英、角閃 石を含み、やや粗い	外面：貝殻条痕(＼)、底部外面： ナデ、内面：貝殻条痕(―)、 同心円状	底径 11.8 cm、 被熱により赤 変
						149				
49	縄文	深鉢	底部	A	4層 5層 横転	332	底部外面：10YR6/4 に ぶい黄橙類似、器肉： 10YR4/2 灰黄褐、内面： 10YR6/4 にぶい黄橙類似	角閃石、白色粒子、透 明粒子を含み、やや粗 い	底部外面：貝殻条痕(―)、内 面：同心円状の貝殻条痕	底部外面に粘 土を塗り重ね たような痕
						304				
50	縄文	深鉢	底部	A	4層	444	外面：2.5Y6/3 にぶい黄、 器肉：2.5Y4/1 黄灰、内面： 2.5Y7/4 浅黄	石英、白色粒子を含み、 やや粗い	外面：貝殻条痕(―)、底部外 面：貝殻条痕→ナデ?、内面： ナデ)	底径 (9.8) cm
						368				
51	縄文	深鉢	底部	A	4層 5層 横転	37	外面：10YR6/4 にぶい黄 橙、器肉：10YR4/1 褐灰、 内面：2.5YR7/4 浅黄	白色粒子、石英、角閃 石、赤色粒子を含み、 やや粗い赤色粒子を含 み、ややきめ細かい	外面：ナデ(―)、底部外面： 貝殻条痕(―)、内面：ナデ?	
						74				
						343				
52	縄文	深鉢	底部	A	4層	387	外面：7.5YR6/4 にぶい黄 橙類似、内面：2.5Y5/2 暗灰 褐	石英、白色粒子、角閃 石を含み、やや粗い	外面：貝殻条痕(―)→ナデ (―)、底部外面：貝殻条痕(―) →ナデ(―)、内面：工具ナデ(―) (＼)	底径 (14.9) cm
53	縄文	深鉢	底部	A	4層	528	外面：7.5YR6/4 にぶい黄 橙、内面：10YR6/3 にぶい黄 橙	石英、白色粒子、角閃 石を含み、ややきめ細 かい	外面：貝殻条痕(＼)、底部外面： 工具ナデ?、内面：ナデ(―)	
54	縄文	深鉢	底部	A	4層 5層 横転	77	外面：10YR7/4 にぶい黄 橙、内面：2.5YR3/1 黒褐 ～2.5Y7/3 浅黄	石英、黒色粒子、白色 粒子を含み、ややきめ 細かい	外面：貝殻条痕(―)、底部外 面：ナデ(―)、内面：ナデ?	
						179				
55	縄文	深鉢	底部	A	4層 横転	411	底部外面：10YR7/4 浅黄 類似、器肉：2.5Y4/1 黄灰、 内面：10YR7/4 浅黄類似	白色粒子、角閃石、透 明粒子を含み、やや粗 い	底部外面：ナデ(―)、内面： ユビオサエ、ナデ?	

Tab.12 4層出土遺物観察表(3)

No.	種別	器種	区	層	取上No.	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	備考
56	礫石器	石斧	A	4層	69	13.1	6.7	2.6	328	頁岩 先端刃部磨製
57	礫石器	砥石	A	4層	453	5.2	5.2	6.0	180	磨面あり
58	礫石器	敲石	A	4層	371	8.9	3.7	3.3	129	
59	礫石器	敲石	A	4層	377	9.2	6.3	1.9	132	
61	礫石器	スクレイパ ー状	A	4層	155	4.7	2.9	0.8	10.43	安山岩
60	石器関連	剥片	A	4層	375	8.0	4.6	1.3	36.23	頁岩・ホルンフェルス

44 は、口縁部上部外面に横位の貝殻復縁刺突文が 4 条と、ナデによる器面調整が施されたものである。端部上面は平坦面を持ち、断面形は方形を呈する。45・46 は平坦な口縁部上面に、貝殻復縁による縦位の刺突文を施したものである。外面・内面とも貝殻条痕がうっすらと認められるが、最終調整はナデ調整である。

47～55 は貝殻円筒系土器の底部である。体部は内外面とも貝殻条痕が認められ、外面底部付近は横位の条痕である。底面は貝殻条痕が認められるもの(47・49・51)と木葉痕が認められるものがある(50)。55 は、底面中心部の破片だと思われるが、内面に窪みがあり、底面中心部と思われる。

56 は石斧である。側面には打痕が認められるが、表面のほとんどは磨られて成形されている。57 は、砥石である。一面に磨面が認められる。58・59 は敲石である。58 は縦方向の稜上と、下面に敲打痕が認められる。59 は側面全周に敲打痕が認められるが、特に中心部両側面が著しい。60 は剥片である。61 はスクレイパー状石器で、刃部の一部が丸く磨滅している。

第5節 5層の成果

(1) 5層上面検出遺構 (Fig. 16～18, Tab.13, PL. 23～28)

A区でピット20基 (P5～27) が検出された。埋土は4層土がほとんどである。調査当初、土壌として扱ったSK2は樹痕の可能性が高いと判断されたため、本書では遺構としなかった。

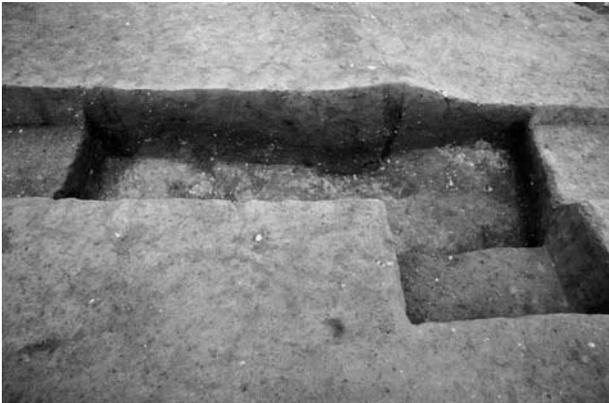
5層上面では、4層以下の土層が横倒しになる「層位横転」が認められた。確認のため、横転した部分を横断するトレンチを2か所設定し (1トレンチ, 2トレンチ), 先行して6層上面までの掘削を行った。横転は、4層から6層の途中まで達していた。2トレンチ内からは小礫が10個ほど集中して検出されたが、横転に伴う小礫の流れ込みの可能性が高いと判断された。層位横転範囲が明瞭に把握できるものについては測量を行ったが、不明瞭な層序も多くみられた。A区の4層から6層上部の層位は、今回把握できた層位横転範囲だけでなく、その周囲も土



PL. 23 5層上面検出状況 (北から)



PL. 24 1トレンチ南壁 (北から)



PL. 25 2トレンチ完掘および北壁 (南から)



PL. 26 2トレンチ出土礫群 (北から)



PL. 27 2トレンチ周辺層位横転 (南から)



PL. 28 2トレンチ5層出土前平式土器

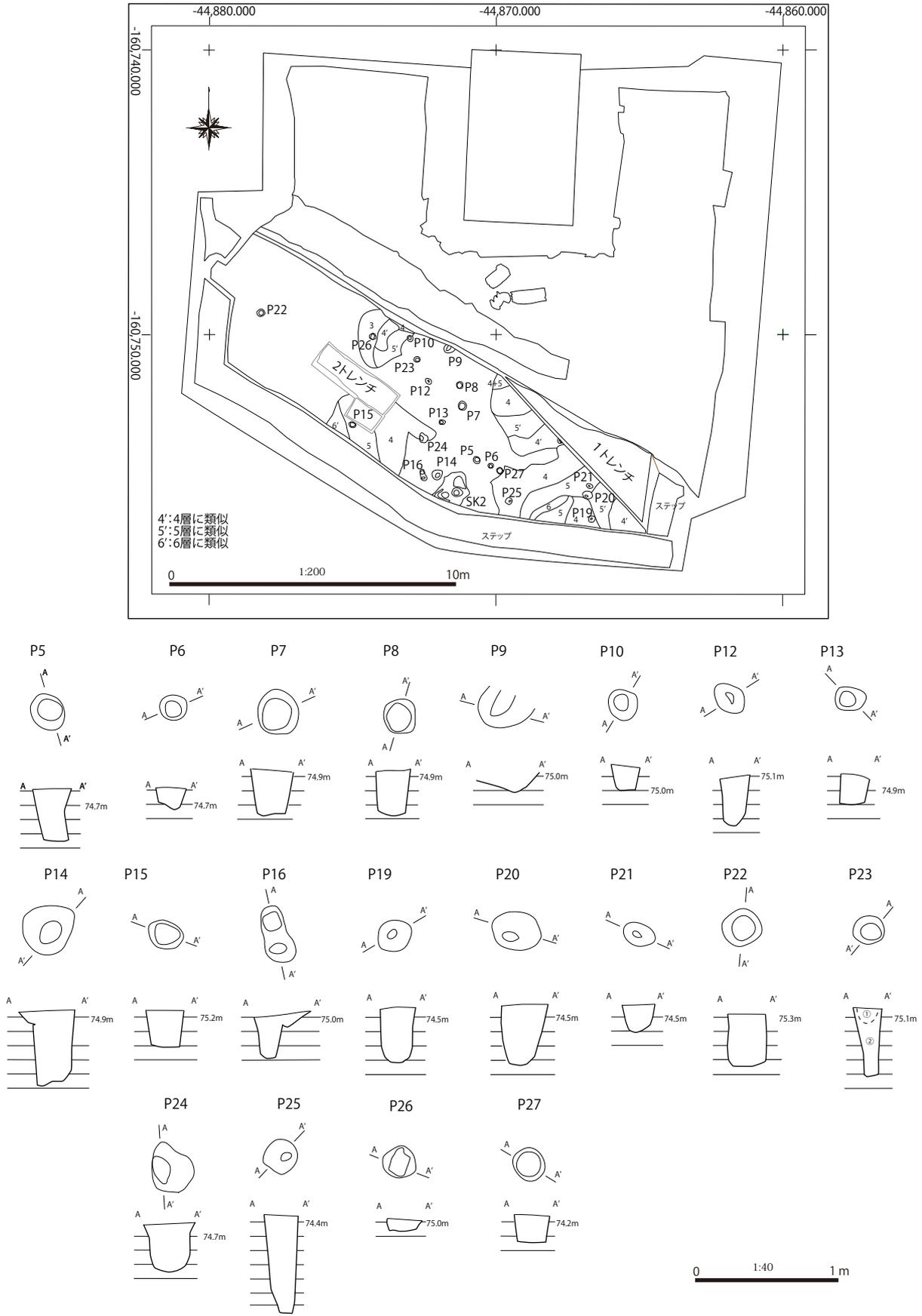


Fig.16 5層上面検出遺構

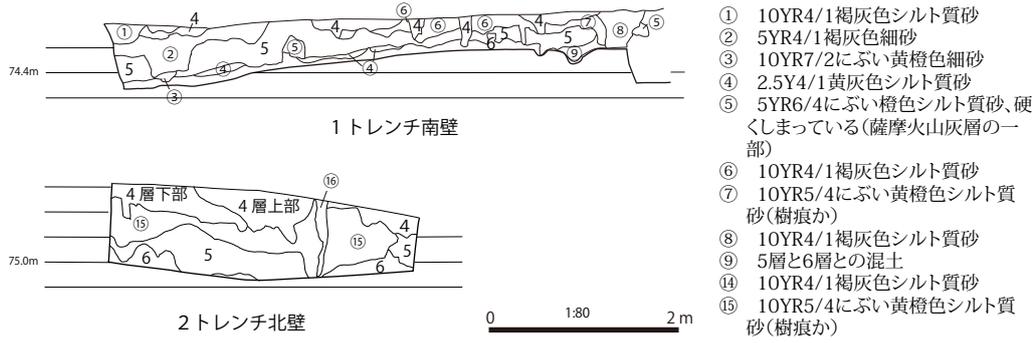


Fig. 17 トレンチ層位断面図 S=1/80

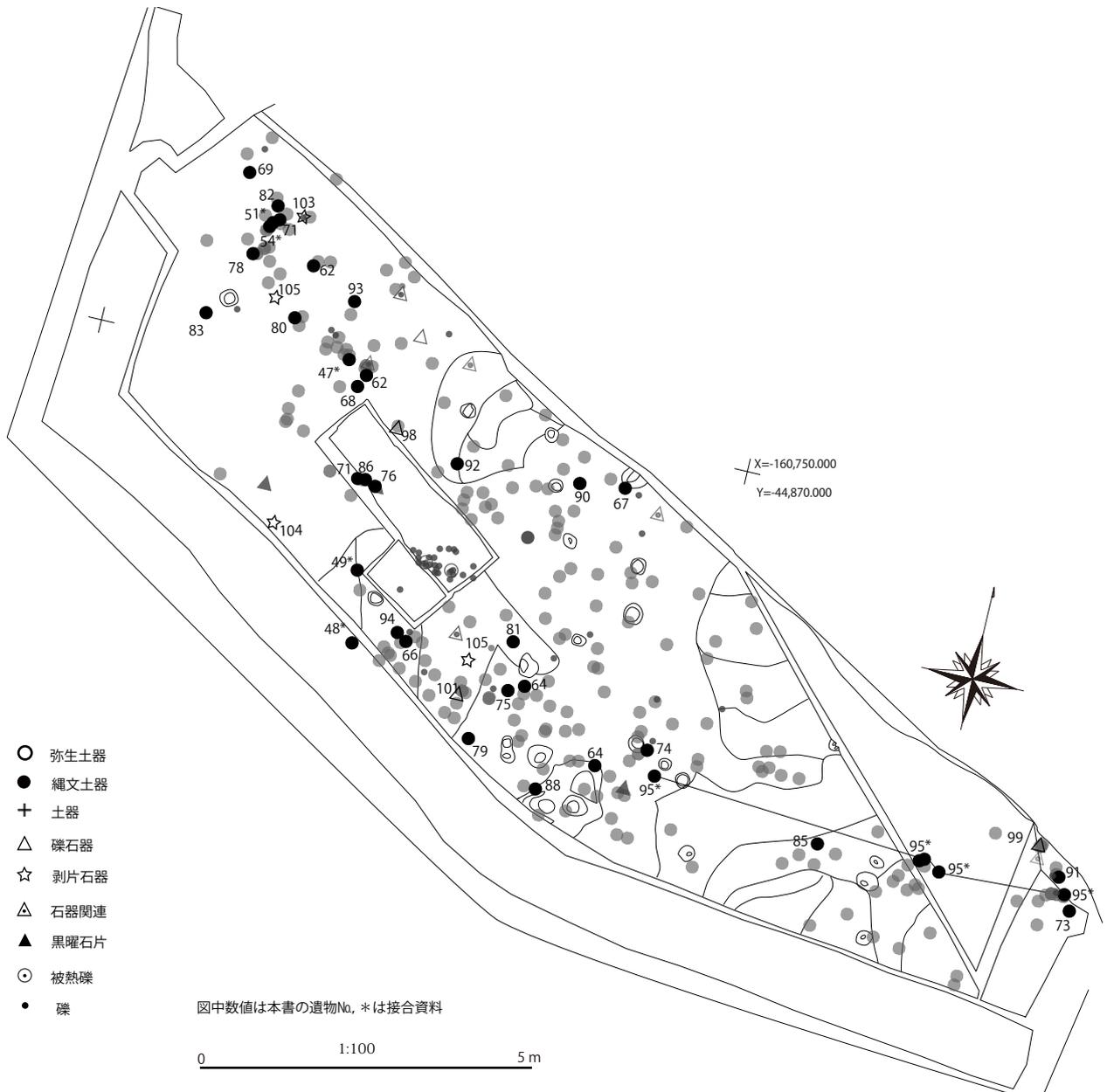


Fig. 18 5層遺物出土状況 S=1/100

Tab.13 5層上面検出遺構一覧

遺構名	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	埋土	遺物	備考
P 5	ピット	28	-	38	10YR5/6 黄褐色アカホヤ, 黄色ブロック含む (5%)	-	
P 6	ピット	22	-	16	10YR4/4 褐色, 黄色ブロック含む (1%)	-	
P 7	ピット	29	-	32	10YR4/4 褐色シルト質砂, 黄色ブロック含む (1%)	-	
P 8	ピット	24	-	33	10YR3/4 暗褐色シルト質砂	-	
P 9	ピット	44	-	16	10YR4/4 褐色砂質シルト, 細かい黄色ブロック含む (5%)	-	
P10	ピット	18	-	18	10YR4/4 褐色シルト質砂, 黄色ブロック含む (5%)	-	
P12	ピット	21	-	39	10YR4/4 褐色シルト質砂, 黄色ブロック含む (5%)	-	
P13	ピット	20	-	23	10YR4/4 褐色シルト質砂, 10YR3/1 黒褐色土がまざる。細かい黄色ブロックを少し含む。	-	
P14	ピット	38	-	54	10YR4/6 褐色シルト質砂, 10YR3/1 黒褐色土がまざる	-	
P15	ピット	26	-	26	10YR4/4 褐色シルト質砂, 細かい黄色ブロックを少し含む。	-	
P16	ピット	39	20	32	10YR4/4 褐色シルト質砂, 10YR3/1 黒褐色土が少量まざる。黄色ブロックを含む (1%)。	-	
P19	ピット	24	-	42	4層土 (アカホヤ)	-	
P20	ピット	32	-	44	4層土 (アカホヤ)	-	
P21	ピット	22	-	21	4層土 (アカホヤ)	-	
P22	ピット	26	-	38	4層土 (アカホヤ)	-	
P23	ピット	20	-	50	① 2.5Y3/2 シルト質砂, 黄色パミス混ざる。② 4層土 (アカホヤ)	-	
P24	ピット	35	-	34	4層土 (アカホヤ)	-	
P25	ピット	24	-	69	4層土 (アカホヤ)	-	
P26	ピット	24	-	10	4層土 (アカホヤ)	-	
P27	ピット	24	-	22	10YR4/3 にぶい黄褐色。しまっている。細かい黄色パミスを少し含む。	-	

層が攪拌されている可能性が高い。

ピット群

P 5～27 までの 20 基を検出した。ほとんどが平面形が円形を呈し、直径 20～30cm の大きさである。埋土は、4層土もしくはそれに類似するものである。深さは 10～70cm とばらつきが多く、規則的な配列も見出せない。出土遺物もなかった。

(2) 5層出土遺物 (Fig. 19～24, Tab. 14～16, PL.29～32)

62～85 は縄文時代早期深鉢形土器の口縁部である。口縁部上部に貝殻復縁による刺突文を施し、基本的には貝殻条痕による器面調整である。岩本式・ホケノ頭Ⅲ類・前平式にあたる。

62～77 は縦位の貝殻刺突文が 2 条施されるタイプ、78～84 は 1 条のみ施されるタイプである。62・63 の口縁部上面に施された刺突は太く、外面の施文具と異なっている。また、内面には明瞭な稜線を有する。62 は内面口縁直下に帯状の赤色顔料を塗布されており、胎土や調整も精緻である。63～77 の上部刺突は、外面刺突文とよく似ており、文様の幅もその間隔も細かい。84・85 は一条の刺突文が施されているが、他と比べると刺突文の縦位の幅がやや長い。

86～96 は縄文時代早期の貝殻円筒系土器の底部である。平底を呈し、ほぼ直立に立ち上がる器形である。外面の器面調整は、底面近くに横方向の条痕を施すもの (86・87)、横位の条痕に重ねて短い縦位の条痕を施すもの (88)、最終調整が丁寧なナデのもの (89～92) が認められる。95 は体部下半部が残存しているが、内面は削り調整が施されている。外面底面付近は、縦位の貝殻刺突文が施されている。94 は、底面部分の破片だが、体部と

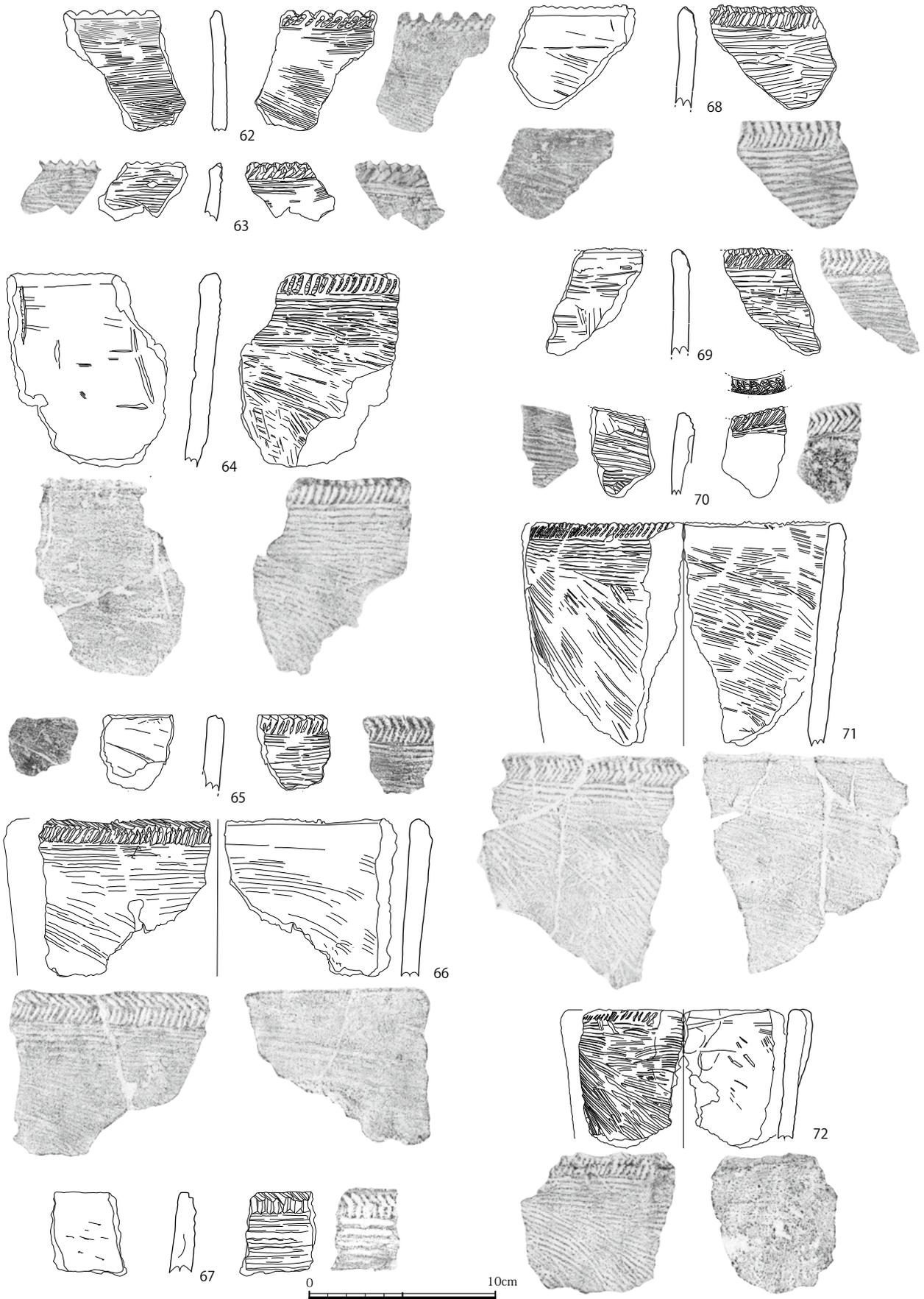


Fig. 19 5層出土遺物(1) S=1/3



Fig.20 5層出土遺物(2) S=1/3

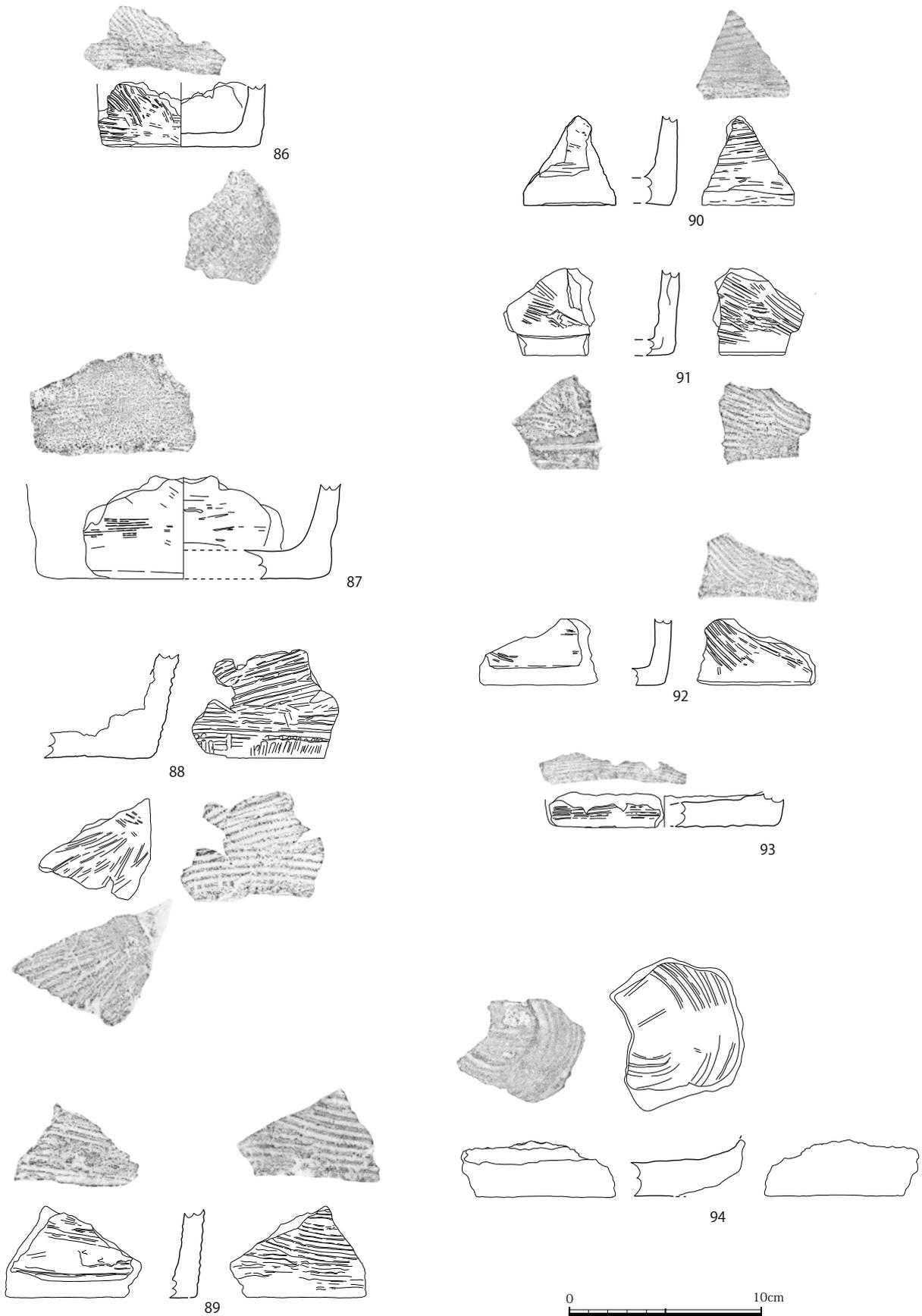


Fig.21 5層出土遺物(3) S=1/3

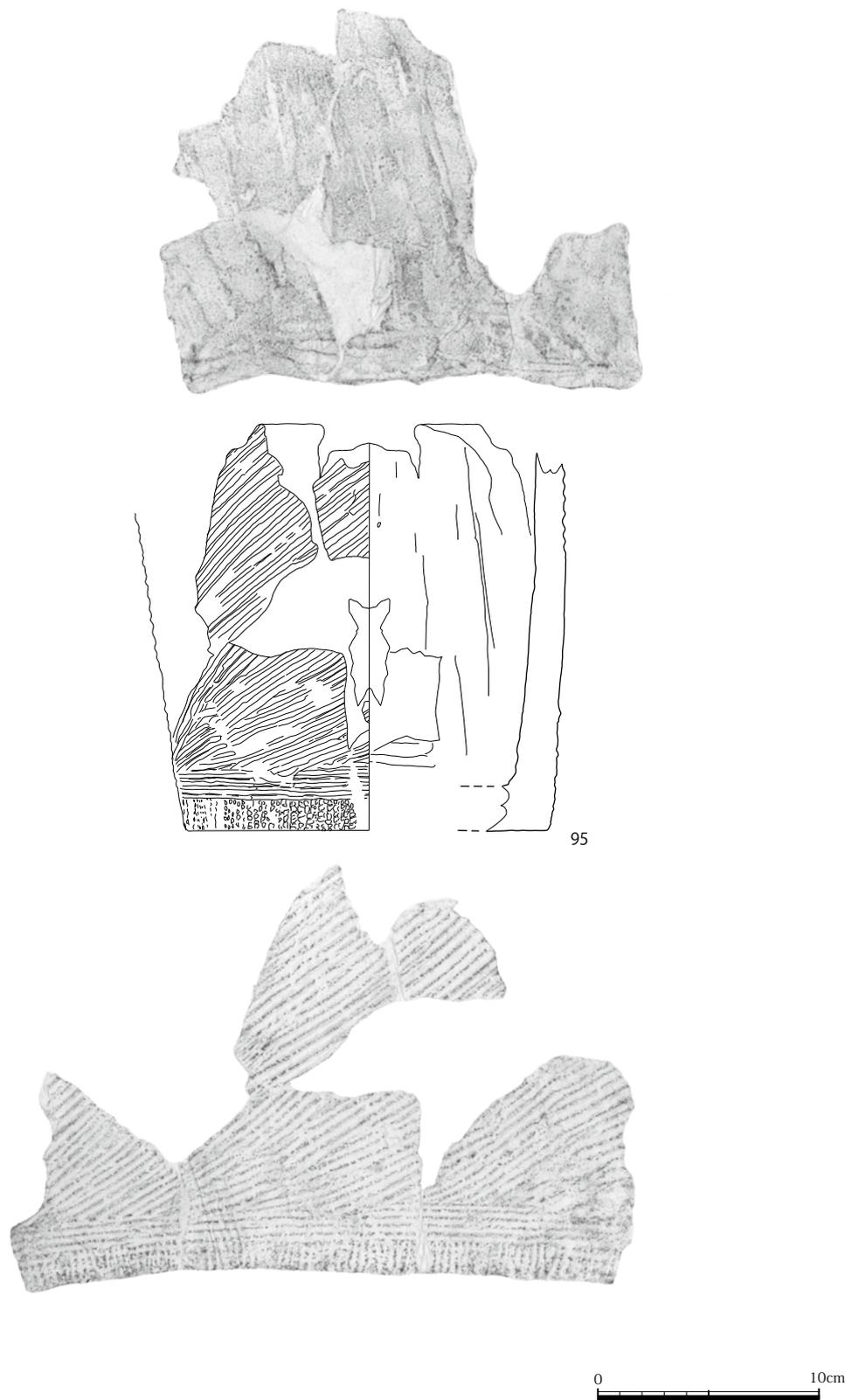
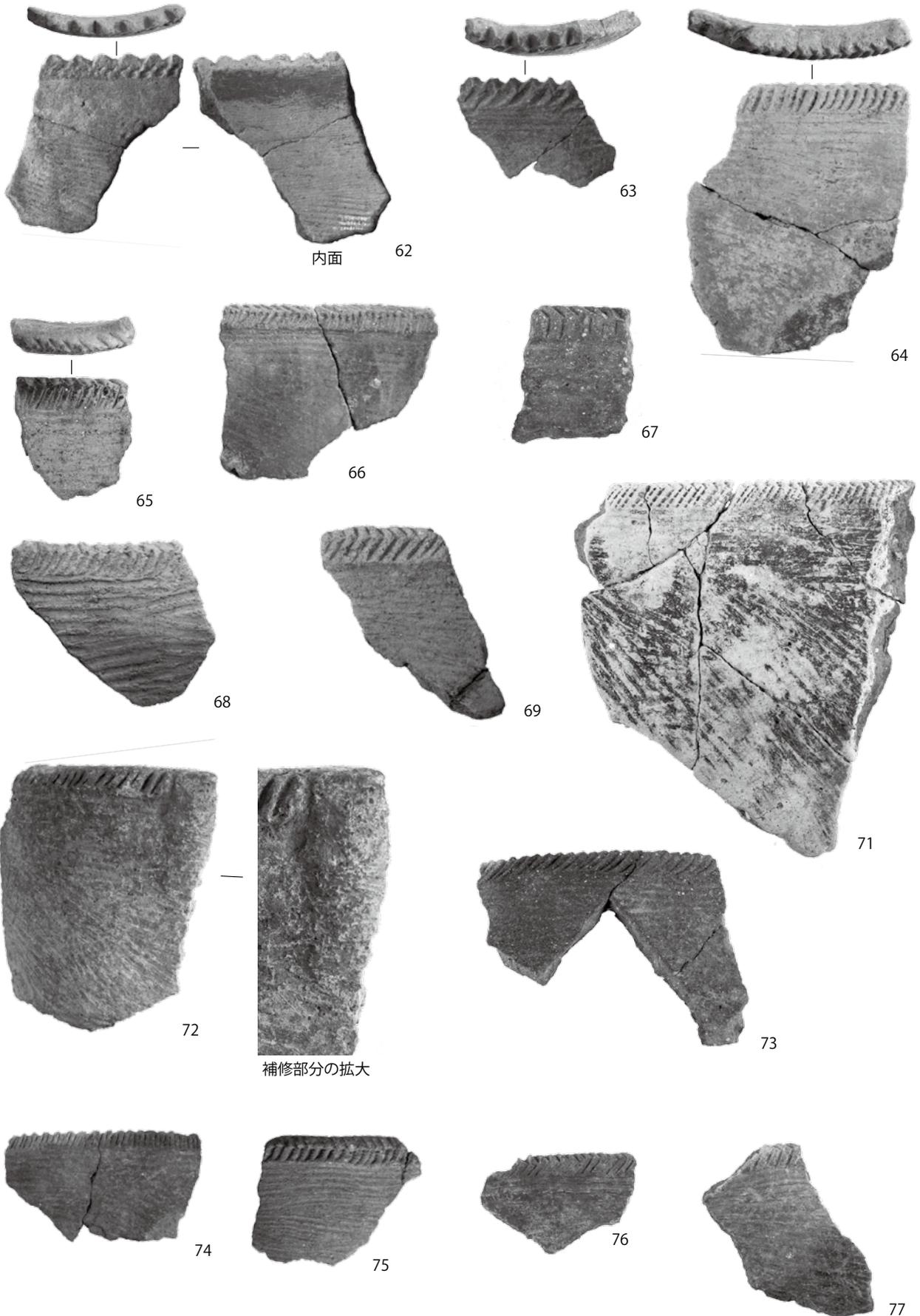
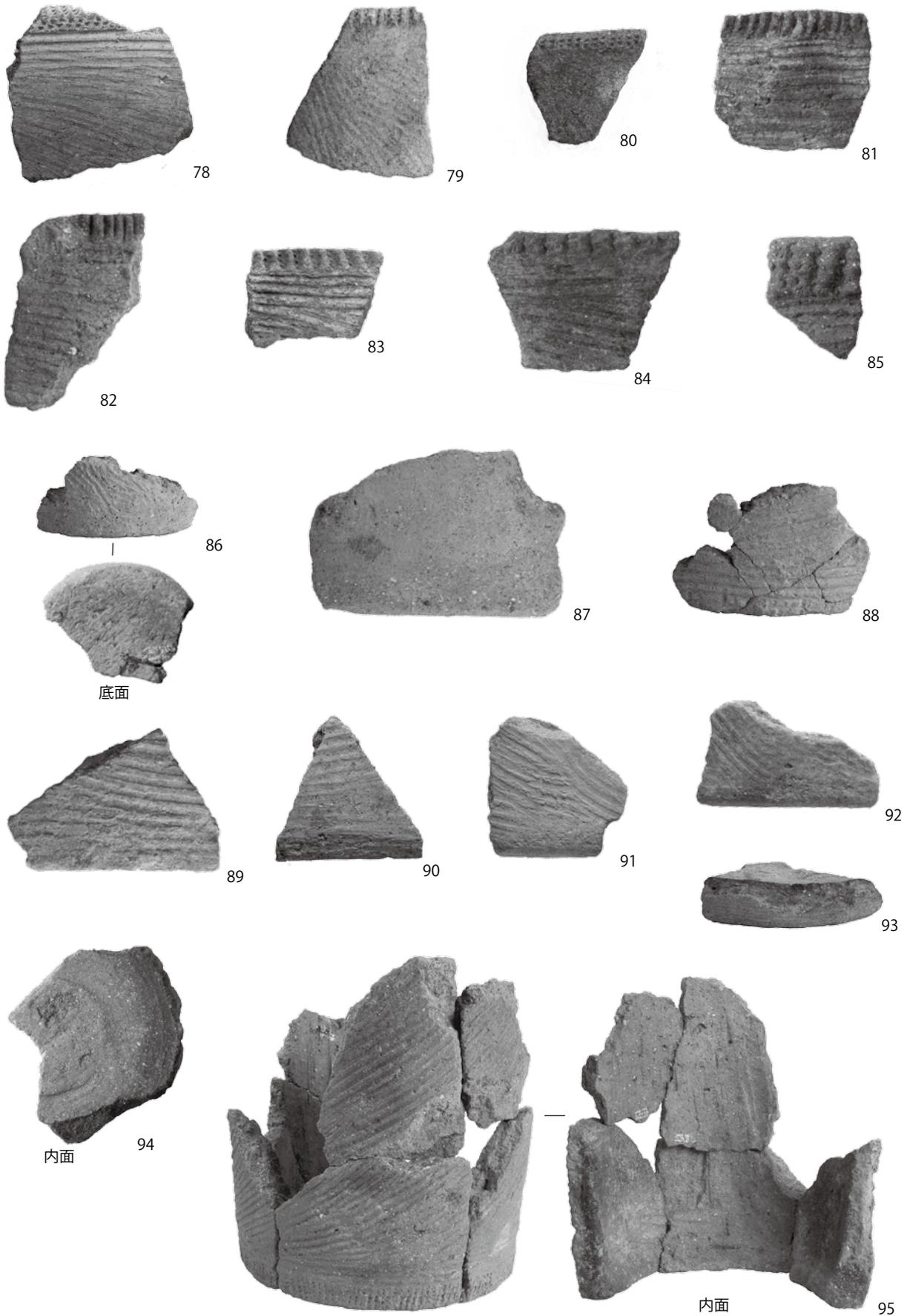


Fig. 22 5層出土遺物(4) S=1/3



PL. 29 5層出土遺物 (1)



PL.30 5層出土遺物(2)

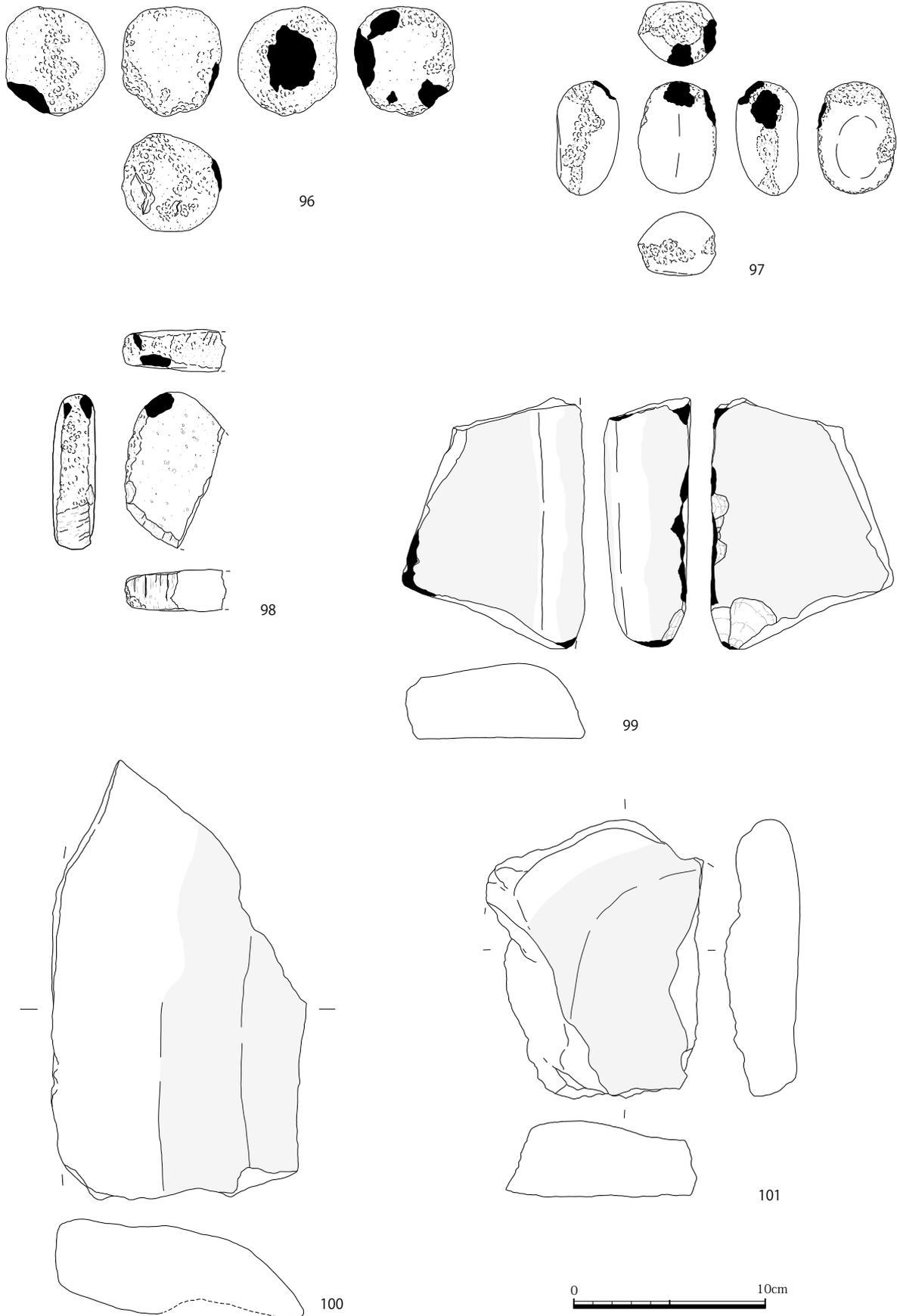


Fig.23 5層出土遺物(5) S=1/3

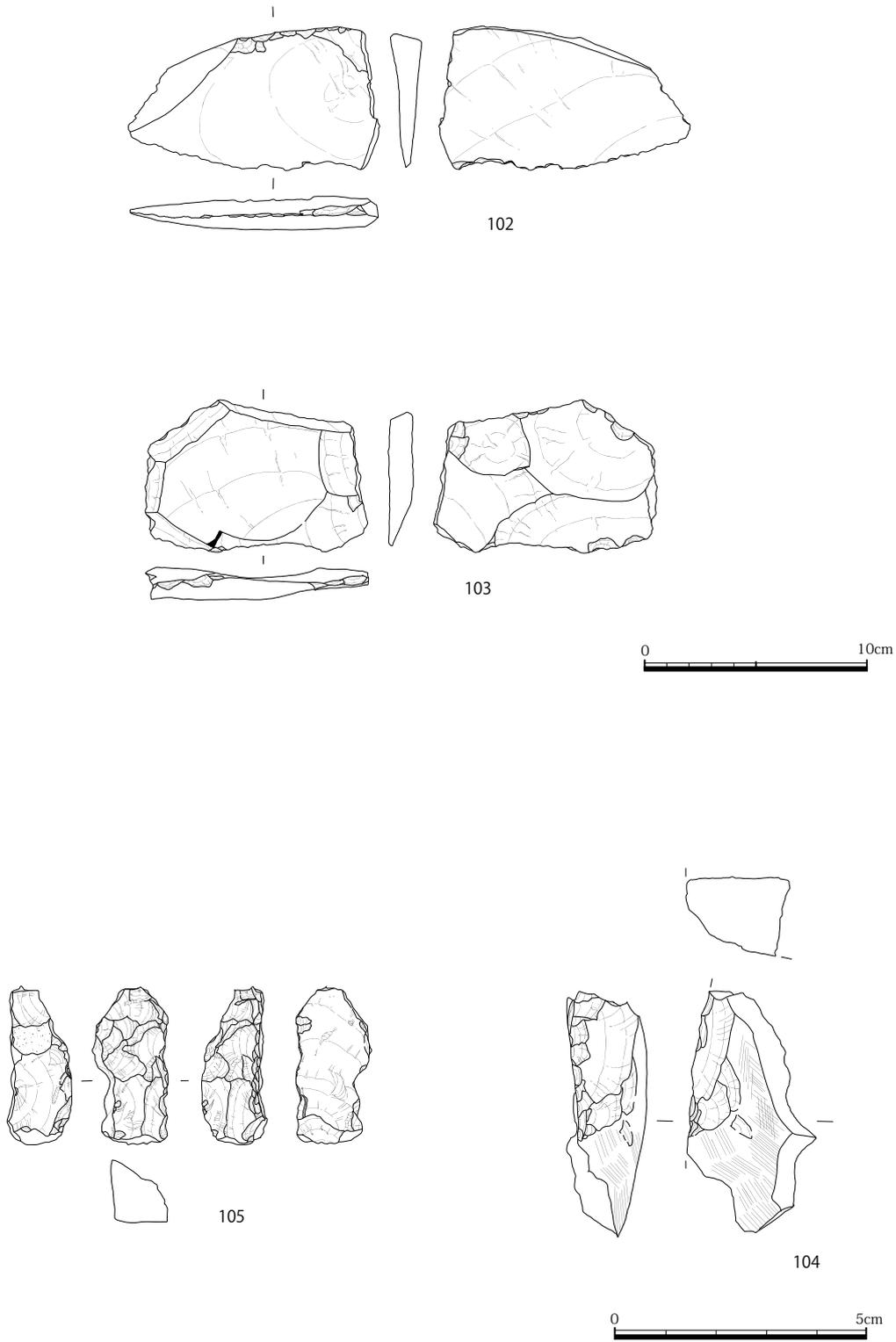
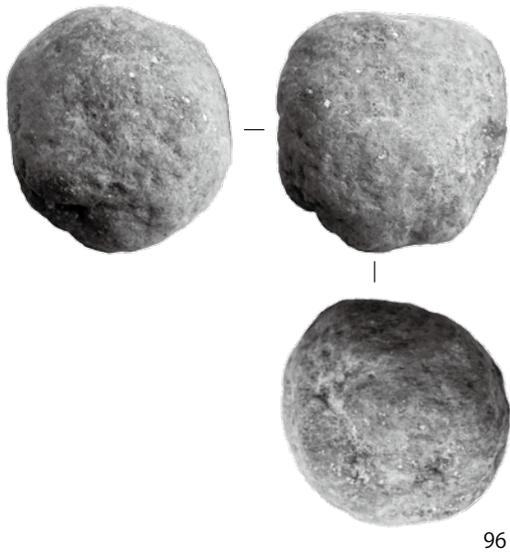


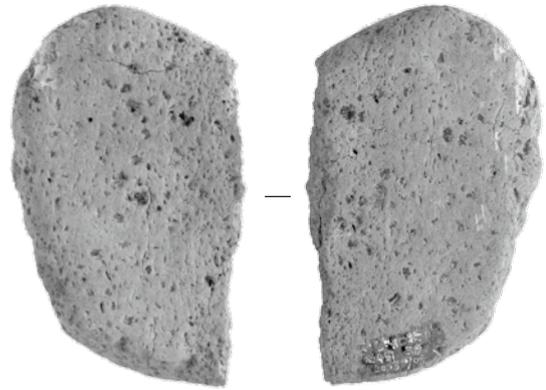
Fig. 24 5層出土遺物(6) 102・103 : S=1/3, 104・105 : S=3/4



96



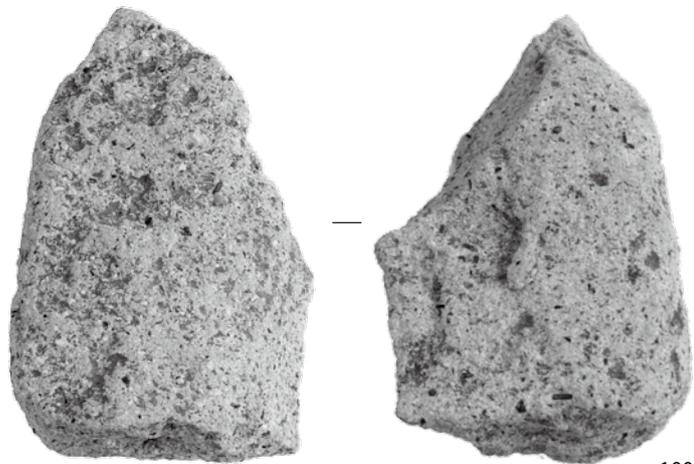
97



98

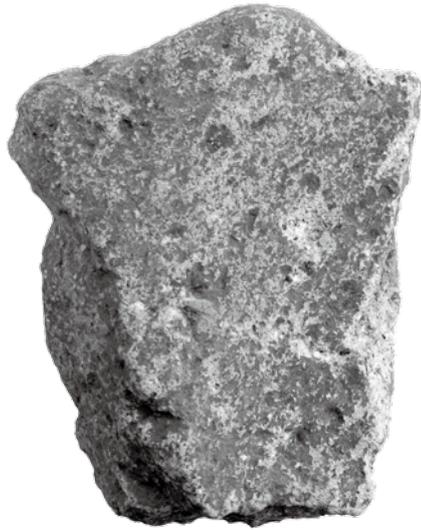


99

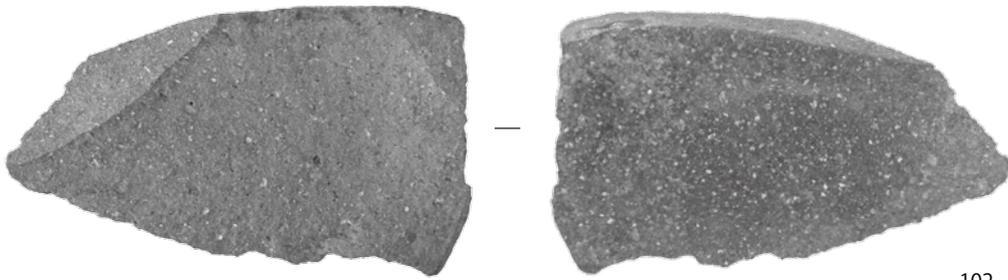


100

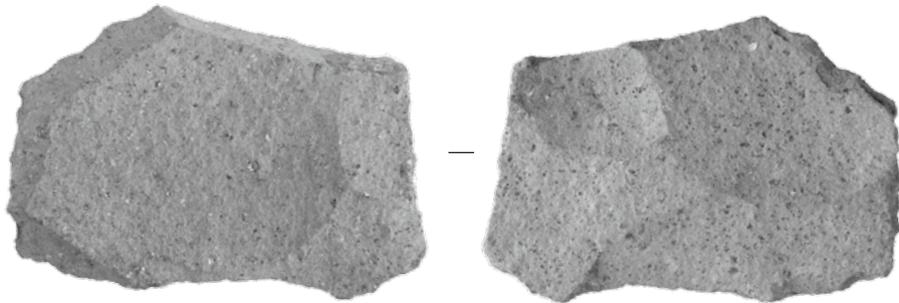
PL.31 5層出土遺物 (3)



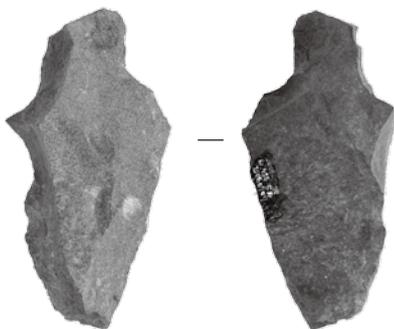
101



102



103



104



105

PL.32 5層出土遺物(4)

Tab.14 5層出土遺物観察表(1)

No.	種別	器種	部位	区	層	取上 No.	色調	胎土	調整	備考
62	縄文	深鉢	口縁部	A	5層	356	外面:10YR6/4にぶい黄褐, 器肉:5Y3/1オリープ黒, 内面:10YR6/4にぶい黄褐類似	石英, 白色粒子, 角閃石を含み, ややきめ細かい	外外面:貝殻条痕(一), 工具ナデ(一), 貝殻刺突文, 内面:工具ナデ(一)→貝殻状痕(〳)	内面に赤色塗彩, 岩本式
63	縄文	深鉢	口縁部	A	5層	400	内外面:10YR4/2 灰黄褐, 器肉:7.5Y2/1 黒	白色粒子, 透明粒子を含み, ややきめ細かい	外面:貝殻条痕(一) 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕(一)	岩本式
64	縄文	深鉢	口縁部	A	5層	649	外面:10YR7/4にぶい黄褐, 内面:7.5YR6/4にぶい橙	石英, 白色粒子, 角閃石を含み, ややきめ細かい	外面:貝殻条痕(一) (〳) 貝殻刺突文, 内面:ケズリ(一)	断面一部黒色, ホケノ頭Ⅲ類
65	縄文	深鉢	口縁部	A	5層	531	外面:10YR6/4にぶい黄橙, 内面:10YR4/1 褐灰	白色粒子, 石英, 黒色粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(一) 貝殻刺突文, 内面:ケズリ(〳)	断面一部黒色, ホケノ頭Ⅲ類
66	縄文	深鉢	口縁部	A	5層	546	外面:10YR6/4にぶい黄橙類似, 内面:7.5Y6/4にぶい橙	白色粒子, 石英, 角閃石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(〳), (一)→ミガキ?, 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕(写〳)→ミガキ?	ふきこぼれ痕?, ホケノ頭Ⅲ類
67	縄文	深鉢	口縁部	A	5層	502	外面:2.5Y3/2 黒褐, 内面:2.5Y3/3 暗オリープ褐	白色粒子, 石英, 角閃石, 赤色粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(一) 貝殻刺突文, 内面:ケズリ(〳)	ホケノ頭Ⅲ類
68	縄文	深鉢	口縁部	A	5層	383	外面:10YR6/4にぶい黄橙~2.5Y3/3 暗オリープ褐	白色粒子, 石英, 角閃石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(一) 貝殻刺突文, 内面:ケズリ(一)→ナデ(一)	ホケノ頭Ⅲ類
69	縄文	深鉢	口縁部	A	5層	75	外面:10YR7/4にぶい黄橙, 器肉:5Y5/1 灰, 内面:10YR7/4にぶい黄橙~7.5YR6/4にぶい橙類似	石英, 白色粒子, 角閃石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(〳) 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕(一)→ナデ(〳) ユビオサエ	ホケノ頭Ⅲ類
70	縄文	深鉢	口縁部	A	5層		外面:10YR3/1 黒褐, 内面:10YR5/3にぶい黄褐	石英, 角閃石, 白色粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻刺突文, 調整は剥落により不明, 内面:貝殻条痕(一) ナデ(一)	外面剥落, ホケノ頭Ⅲ類
71	縄文	深鉢	口縁部	A	5層 横 転	345	外面:10YR7/4にぶい黄褐, 器肉:5Y3/2 オリープ黒, 内面:20YR8/4 浅黄橙	白色粒子, 角閃石, 石英, 赤色粒子を含み, ややきめ細かい	外面:貝殻条痕(一) (〳) 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕(〳)→ナデ	口径(17) cm, 外面スス付着, ホケノ頭Ⅲ類
72	縄文	深鉢	口縁部	A	5層 横 転	715	外面:2.5Y3/2 黒褐, 内面:10YR3/2 黒褐	石英, 角閃石, 白色粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(〳) (一) 貝殻刺突文, 内面:ケズリ(〳) (一)→ミガキ?, ユビオサエ	口径(13.5) cm, 粘土貼り付け補修か, ホケノ頭Ⅲ類
73	縄文	深鉢	口縁部	A	5層		外面:2.5Y3/1 黒褐, 内面:10YR5/4にぶい黄褐	石英, 角閃石, 白色粒を含む, やや粗い	外面:貝殻条痕(一) 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕(一) ナデ	口径(15.6) cm, ホケノ頭Ⅲ類
74	縄文	深鉢	口縁部	A	5層	292	外面:10YR2/1 黒, 内面:7.5YR4/3 褐~10YR3/3 暗褐	白色粒子, 透明粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(〳)→(一) 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕(一) ナデ(一)	口径(12.4) cm, 外面スス付着, ホケノ頭Ⅲ類
75	縄文	深鉢	口縁部	A	5層		外面:10YR5/3にぶい黄褐, 内面:7.4YR6/4にぶい橙	白色粒, 石英, 角閃石, 赤色粒, 礫含む, やや粗い	外面:貝殻条痕(一) 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕(〳) ナデ	ホケノ頭Ⅲ類
76	縄文	深鉢	口縁部	A	5層 横 転		外面:2.5Y4/1 黄灰, 内面:2.5Y7/4 浅黄	黒色粒子, 透明粒子をふくみ, やや粗い	外面:貝殻条痕(一) 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕(一)→ナデ(一) ユビオサエ	ホケノ頭Ⅲ類
77	縄文	深鉢	口縁部	2ト レン チ	5層 横 転		外面:10YR5/3にぶい黄褐, 内面:10YR6/4にぶい黄褐~2.5Y3/1 黒褐	白色粒子, 石英, 角閃石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(〳) 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕(〳)→ナデ(一)	外面スス付着, ホケノ頭Ⅲ類
78	縄文	深鉢	口縁部	A	5層 横 転	297	外面:10YR7/2にぶい黄橙~10YR4/2 灰黄褐, 器肉:5Y2/1 黒, 内面:10YR6/4にぶい黄橙	白色粒子, 石英, 角閃石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(一)→(〳), 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕(一)→ナデ(〳)	ホケノ頭Ⅲ類
79	縄文	深鉢	口縁部	A	5層	449	外面:2.5Y7/3 浅黄, 器肉:2.5Y5/2 暗灰黄, 内面:2.5Y7/4 浅黄	石英, 白色粒子, 角閃石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(一)→(〳) 貝殻刺突文, 内面:貝殻条痕(一)→ナデ(〳)	前平式
80	縄文	深鉢	口縁部	A	5層		外面:N21 黒, 内面:5Y3/1 オリープ黒	石英, 白色粒を含む	外面:貝殻条痕(一) (〳) 内面:ナデ	前平式
81	縄文	深鉢	口縁部	A	5層	603	外面:10YR6/4にぶい黄橙~5Y4/1 灰, 内面:7.5Y5/4にぶい褐	白色粒子, 石英, 角閃石を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(一) 貝殻刺突文, 内面:ケズリ(〳) ユビオサエ	前平式

Tab.15 5層出土遺物観察表(2)

No.	種別	器種	部位	区	層	取上 No.	色調	胎土	調整	備考	
82	縄文	深鉢	口部	緑	A	5層	-	外面:7.5YR5/4にぶ い褐,内面:7.5YR5/3 にぶい褐	石英,角閃石,白粒 粒,礫を含む,粗 い	外面:貝殻条痕(一)貝殻 刺突文,内面:貝殻条痕(\\) →ナデ	前平式
83	縄文	深鉢	口部	緑	A	5層	457	外面:10YR5/2灰黄褐, 2.5Y3/1黒褐	石英,白色粒子を 含み,やや粗い	外面:貝殻条痕(一)→(\\), 貝殻刺突文,内面:ナデ (\\)?	炭化物付着,前平 式
84	縄文	深鉢	口部	緑	1ト レン チ	5層	-	外面:10YR5/2灰黄褐 類似,内面:10YR4/2 灰黄褐類似	白色粒子,石英, 黒色粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(一)貝殻 刺突文,内面:ケズリ(\\) →ミガキ(\\)	外面スス付着,前 平式
85	縄文	深鉢	口部	緑	A	5層	183	外面:10YR5/3にぶ い黄褐,内面:7.5Y4/4 褐	白色粒子,石英, 角閃石,赤色粒子 を含み,やや粗い	外面:貝殻条痕(一)貝殻 刺突文,内面:ナデ?	前平式
86	縄文	深鉢	底部	A	5層 横転	714	外面:10YR6/4にぶ い黄橙,内面:10YR6/4 にぶい黄橙類似	黒色粒子,白色粒 子,透明粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(一)(\\), 底部外面:ナデ(一),内面: ユビオサエ,ナデ(一)	底径(8.2)cm,器 肉一部黒色	
87	縄文	深鉢	底部	1ト レン チ	5層	-	外面:5YR6/6橙,器 肉:2.5Y3/1黄灰,内面: 10YR6/4にぶい黄橙	白色粒子,石英, 角閃石を含み,や や粗い	外面:貝殻条痕(一),内面: ナデ(一)	底径(15.4)cm,器 表面摩滅	
88	縄文	深鉢	底部	A	5層	547	外面:10YR5/4にぶ い黄褐,内面:5YR6/6 橙~2.5Y3/2黒褐	白色粒子,透明粒 子を含み,やや粗 い	外面:貝殻条痕(一)→(\\), 底部外面:貝殻条痕(一), 内面:剥落により不明	被熱により赤変	
89	縄文	深鉢	底部	A	5層	735	外面:10YR6/4にぶ い黄橙類似,内面: 5YR6/6橙	白色粒子,石英, 黒色粒子を含み, やや粗い	外面:貝殻条痕(一)底部 外面:ナデ?,内面:貝殻 条痕(一)		
90	縄文	深鉢	底部	A	5層 横転	673	外面:7.5YR6/4にぶ い橙,内面:10YR3/1 黒褐	白色粒子,石英, 角閃石を含み,や や粗い	外面:ナデ(一),貝殻条痕 (一)底部外面:ナデ,内面: 底部貝殻条痕(一)胴部ミ ガキ(\\)		
91	縄文	深鉢	底部	A	5層	724	外面:7.5YR5/4にぶ い褐色,内面: 10YR4/3にぶい黄褐	白色粒子,石英を 含み,やや粗い	外面:貝殻条痕(一)→(\\), 底部外面:ナデ?,内面: 貝殻条痕(\\)→ナデ(一) (\\)		
92	縄文	深鉢	底部	A	5層 横転	693	外面:10YR6/4にぶ い黄橙,器肉:10YR3/1 黒褐,内面:7.5YRに ぶい橙	角閃石,白色粒子, 石英を含み,やや 粗い	外面:貝殻条痕(\\)底部 外面:ナデ?,内面:貝殻 条痕(一)→ナデ(一)		
93	縄文	深鉢	底部	1ト レン チ	5層	-	面:2.5Y5/2暗灰黄, 黄肉:2.5Y2/1黒,内面: 10YR7/3にぶい黄橙	白色粒子,石英, 角閃石を含み,や や粗い	外面:貝殻条痕(一)底部 外面:ナデ?,内面:ユビ オサエ,工具打ち込み痕, ナデ(一)	底径(11.6)cm	
94	縄文	深鉢	底部	A	5層	544	底部外面:10YR5/3 にぶい黄褐類似,内面: 7.5YR6/4にぶい橙~ 2.5Y2/1黒	白色粒子,石英, 黒色粒子を含み, やや粗い	底部外面:ミガキ(一)内 面:貝殻条痕(一)→同心 円状		
95	縄文	深鉢	胴部~ 底部	A	5層	187 189 190 717 718 719 720 747	外面:10YR5/3にぶ い黄褐~5YR5/4にぶ い赤褐,内面:2.5Y5/3 黄褐色~5YR5/4にぶ い赤褐,2.5Y3/1黒褐	白色粒子,石英, 赤色粒子,黒色粒 子を含み,やや粗 い	外面:底部付近貝殻刺突 文,貝殻条痕(一)胴部貝 殻条痕(\\)底部外面:ケ ズリ(一)→ミガキ(一), 内面:底部付近ナデ(一), 胴部ケズリ(\\)	径16.3cm,被熱に より赤変	

Tab. 16 5層出土遺物観察表 (3)

No.	種別	器種	区	層	取上No.	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	備考
96	礫石器	敲石	A	5層	481	5.8	5.2	5.2	190	安山岩
97	礫石器	敲石	A	5層		5.9	4.1	3.8	85.42	被熱か
98	礫石器	敲石	A	5層	451	8.2	5.2	2.2	104.04	凝灰岩
99	礫石器	砥石	A	5層	742	13.2	9.6	4.6	700	砂岩
100	礫石器	砥石	A	5層	612	16.6	9.0	3.6	525	
101	礫石器	砥石?	A	5層	731	13.3	10.2	3.6	500	
102	剥片石器	スクレイパー	A	5層	369	11.3	6.5	1.5	95.38	
103	石器関連	剥片	A	5層	415	10.0	6.9	2.0	105.28	
104	礫石器	石斧片?	A	5層	486	6.6	3.4	2.1	43.95	砂岩, 側面2次加工有, 転用か?
105	礫石器	スクレイパー	A	5層	675	5.9	2.8	2.4	36.64	黒曜石



PL.33 6層上面検出状況 (北から)



PL.34 5層完掘状況 (北から)



PL.35 6層土重機掘削状況 (西から)

の接合部で欠損しており、円盤状の底面外側に体部を接合した痕跡がよく残っている。

96～98は敲石である。96・97は拳大以下の円礫表面数か所に敲打痕が認められる。98は扁平だが、その側面に敲打痕が認められる。99～101は砥石である。一表面が平坦もしくはなだらかな面を有し、磨面が認められる。102はスクレイパーである。扁平な形状で、長辺の一边が刃部となっている。刃部には微細な剥離痕が認められる。104は、石斧の一部と考えられる。表面の一部に磨面が認められる。105は黒曜石製のスクレイパーである。断面三角形形状を呈し、稜の一部に微細剥離痕が認められる。103は、扁平な形状を呈する剥片である。

第6節 7層の成果

(1) 7層上面検出状況

厚さ約1.5mの6層薩摩火山灰を除去したところ、A区B区ともに7層であるいわゆるチョコ層を検出した。この上面は、約13000年前の桜島噴火によって覆われた当時の地表面であったと推定され、当時の地形を残していると考えてよい。7層上面は西から東側に傾斜し、さらに東側は南北にそれぞれ傾斜しているが、南東への傾斜より北東側の傾斜がきつい (Fig. 25)。

7層は7a～7d層に細分し、各層の上面を検出したが、上面の地形は7層上面の傾向とおおよそ同じである。いずれの面でも遺構は確認できなかった。

(2) 7層出土遺物

7a層では、草創期の土器片が9点ほど出土している (PL.37)。ごく小片のため、文様や調整は不明である。その他、

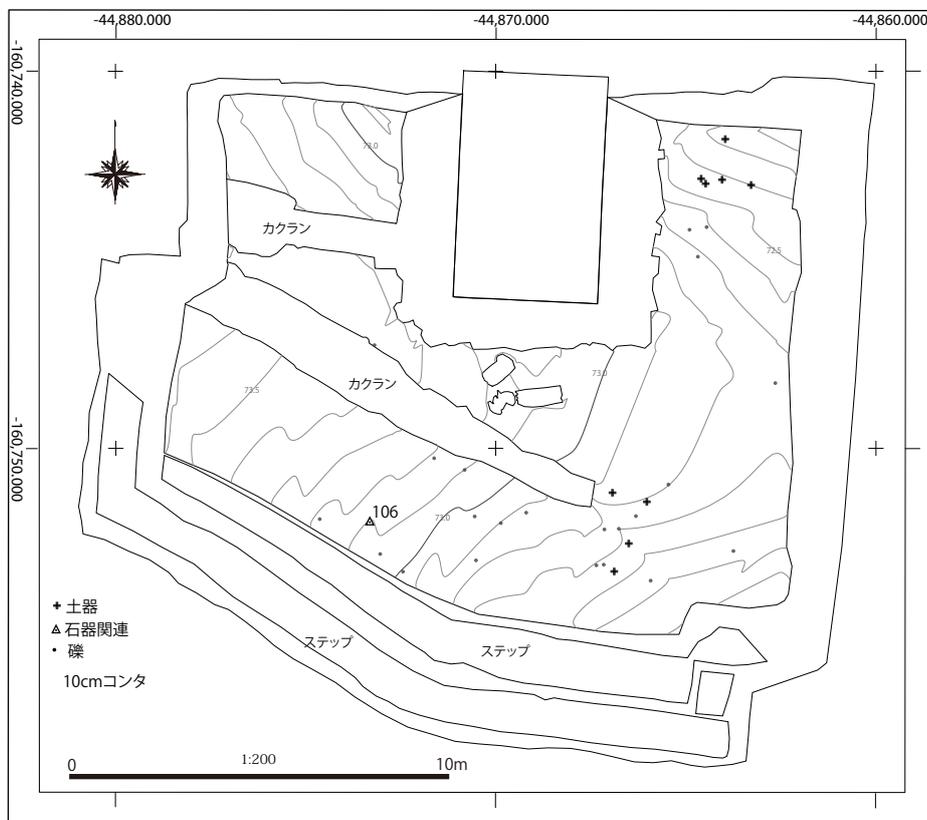


Fig. 25 7層上面検出状況と7a層・7b層遺物出土状況 S=1/200

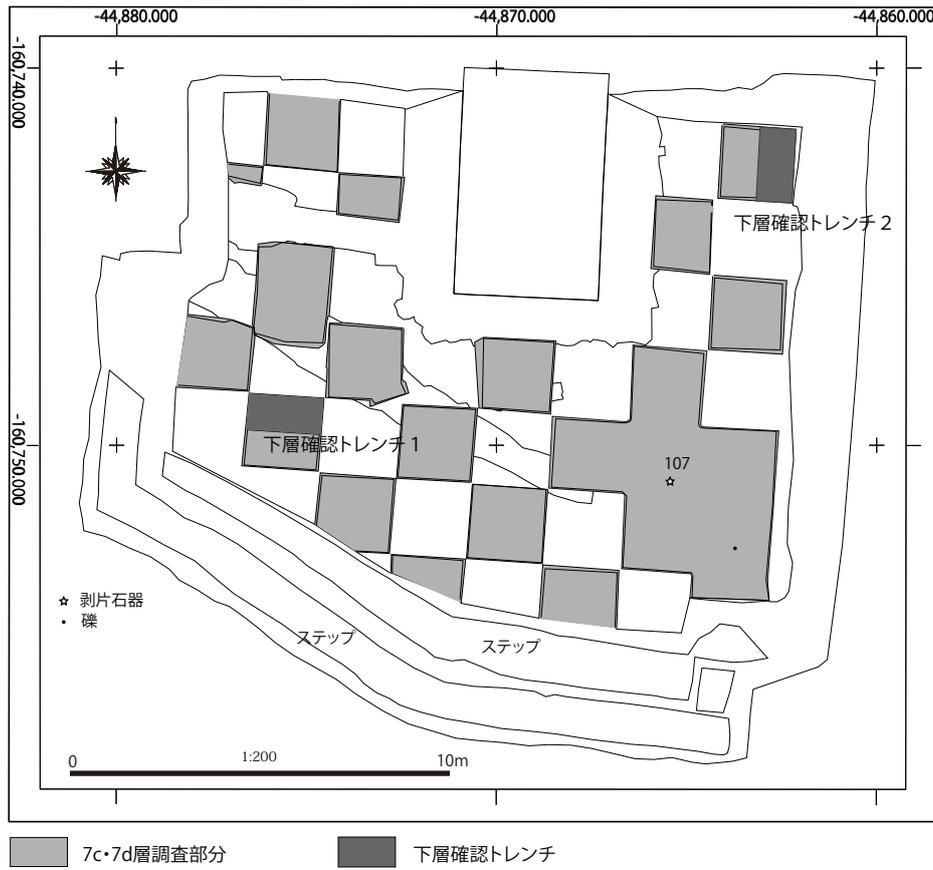


Fig. 26 7c層・7d層調査部分と下層確認トレンチの位置 S= 1/200



PL. 36 7層上面検出状況 (東から)



PL. 37 縄文時代草創期土器片出土状況 (7a層中)



PL. 38 細石刃出土状況 (7層中 報告書遺物No.107)



PL. 39 調査完掘状況 (東から)

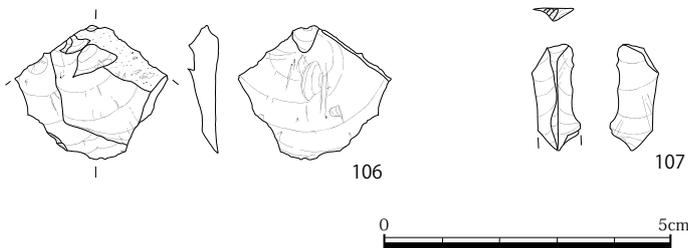
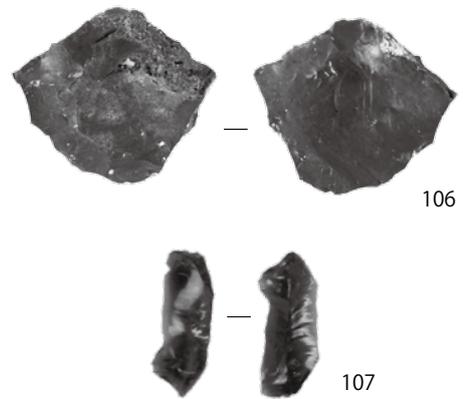


Fig. 27 7層出土遺物 S=3/4



PL. 40 7層出土遺物

Tab. 17 7層出土遺物観察表

No.	種別	器種	区	層	取上No.	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	備考
106	剥片石器		A	7a層	759	3.8	3.4	0.8	8.81	黒曜石(上牛鼻)
107	剥片石器	細石刃		7d層	778	1.4	0.6	0.2	0.14	黒曜石(桑ノ木津留産?)

上牛鼻産黒曜石の微小剥離痕のみられる剥片が1点出土している (Fig.27-106)。7b・7c層からは、礫のみ出土し、遺物はなかった。7d層では、細石刃が1点出土している (Fig.27-107)。下端部を欠損しているが、石材は桑ノ木津留産の黒曜石である。

第7章 まとめ

第1節 各層の時期

本調査では、基本土層として1～9層までを確認したが、このうち遺物包含層は1～5・7層である。1層は盛土で、本学キャンパスの造成に由来する層である。2層はキャンパス造成前にあった近現代の耕作土を基盤として、一部キャンパス造成時に動かされた可能性もある。3層は中近世以前の遺物が出土しており、耕作土であると考えられる。それ以下では確認できない縄文時代晩期から弥生時代の土器片も出土していることから、これらの時期の遺物包含層でもある。

4・5層は縄文時代早期土器が主な出土遺物で、出土量も多い。4層はアカホヤ火山灰層であるが、5層より若

Tab. 18 層別遺物出土状況

種別	種類・器種など		1層・カ クラン	2層上面			2層	3層	4層	4層横 転内	5層 上面	5層 横転	6層 上面	6層横 転内	横転内 (層不明)	7a層	7b層	7c層	7d層
				SD1	SD2	遺構外													
陶器	苗代川	播鉢				1	1												
陶器	苗代川	土瓶の蓋			1	1													
陶器	苗代川	鉢				1													
陶器	苗代川	土鍋				1													
陶器	豎野か苗代川	土瓶の蓋				1													
陶器	豎野か?	土瓶				1													
陶器	龍門司	皿				1													
陶器	始良加治木系	小皿				1													
陶器	始良加治木系	香炉				1													
陶器	備前	播鉢	1				1												
陶器		火入れ				2													
陶器			2	2	1	39													
磁器	肥前か					2													
磁器	肥前か	急須の蓋				1													
磁器	肥前か	碗か蓋				1													
磁器	中国産清朝	皿	1	1															
磁器	中国産か	皿				1													
磁器			2	2	1	27													
古銭			1																
金属製品	鉄?					1													
土器片	甕						1												
土器片			3	1	5	4	4	26		7	1				9				
弥生	甕			1			1												
弥生	一							1											
縄文土器	深鉢							51	17	2	46	17	1	1	3				
縄文土器	一		11	15	4	2	10	3	213	60	3	166	34	2	2	6			
礫石器	砥石					1					1								
礫石器	磨石・敲石	1?						2			3								
礫石器	石斧							2			1								
礫石器	石皿							1			1								
礫石器	軽石製品	1																	
剥片石器	石鏃					2													
剥片石器	細石刃																		1
石器関連	フレイク	1						2	1		4				1				
石器関連	チップ					1													
石器関連	剥片					1		1											
石	黒曜石片											1				1			
石	被熱								3		3	1							
石	その他		2	1	5	2	16	9			63	3		1	1	11	5	1	

表中数字は個数

干新しいタイプの土器が含まれるものの、いずれも縄文時代早期前半代に収まるもので、アカホヤの起源である鬼界カルデラ噴火時期（約7,400年前）より古い。4・5層が残存していたA区全面において層位横転が確認できることから、4～6層上部は相当な攪拌を受けていると思われる。

7層では、後期旧石器時代末～縄文時代草創期である。出土遺物数は多くはないが、鹿児島大学構内遺跡桜ヶ丘団地において初めて縄文時代草創期の土器が確認された。また、本調査区の100mほど南（中央診療棟新営に伴う発掘調査、Fig. 3 2007-1・89-2）では、7a層から石鏃が単発的に出土している。本調査区は縄文時代草創期の遺物が確認されたエリアの中でも台地の上部に位置する。土器片が複数片出土したことから、居住域に近い地点である可能性が高い。

7c・d層は後期旧石器時代と位置づけられる。本調査では遺構は検出されなかったが、Fig.3 2000-2調査において7c層上面で4基の、Fig. 3 2009-4調査において7d層上面で2基の陥穴状遺構が確認されている。後期旧石器時代において、桜ヶ丘団地東側は狩場として利用されていた可能性が高い。

第2節 縄文時代早期土器について

本調査区の出土遺物のほとんどが縄文時代早期前半の土器である。これらの土器は施文方法や器面調整、器形等により口縁部7類（A～F類）、底部3類（G～I類）に分類できた（Fig.28）。

A類：直立した口縁部上面に太い刺突文が施される事によって

鋸歯状を呈し、その直下外面に細かい貝殻復縁刺突文を施すもので、器面は丁寧で貝殻条痕の後ナデ調整を施している。口唇部内面には明瞭な稜線を持つ。岩本式である。

B類：A類と同じく太い刺突文を口縁部上面に施し、端部は鋸歯状を呈するが、その外面直下に施された縦位の貝殻復縁刺突文はA類より太く、深い。また、外面には横位もしくは斜位の貝殻条痕による調整が施されるが、あまりナデ消されていない。内面に明瞭な稜線をもつものもあり、本書では岩本式の範疇でとらえたい。

C類：口縁部上端に2段の縦位の貝殻刺突文が施され、各刺突文は太さが均一で同じ施文具によって施されたものと推定される。外面の貝殻条痕もA・B類に比べると粗い。基本的に内面は無文だが（C1類）、1点だけ内面にヘラ描きの2条並行沈線文が認められた（C2類）。桑波田（2001）によって、「ホケノ頭Ⅲ類」と位置づけられたものである。

D類：口縁端部外面に1段の貝殻復縁による刺突文が施されるもので、外面の貝殻条痕による器面調整は粗い。刺突文や器面調整はC類に類似するため、同時期であろうと思われる。前平式土器である。

E類：やや外反気味に直立する器形で、口唇部断面は方形である。端部に貝殻復縁による刺突文が施されており、その圧迫によって口縁部上面部分が内側にやや広がる。器面は貝殻条痕による調整が施されているが、最終調整はナデである。型式は不明である。

F類：口縁部外面上部に貝殻復縁による横位4条の刺突文が施されている。外面器面調整は、貝殻条痕の後よくナデ消されている。倉園B式である。

G類：円盤状の平底底部から直線的に立ち上がる器形を呈し、器面調整は外面内面とも貝殻条痕である。外面底部付近は横方向のナデを施すものが多い。内面は条痕のほとんどがナデ消されているものが多い。

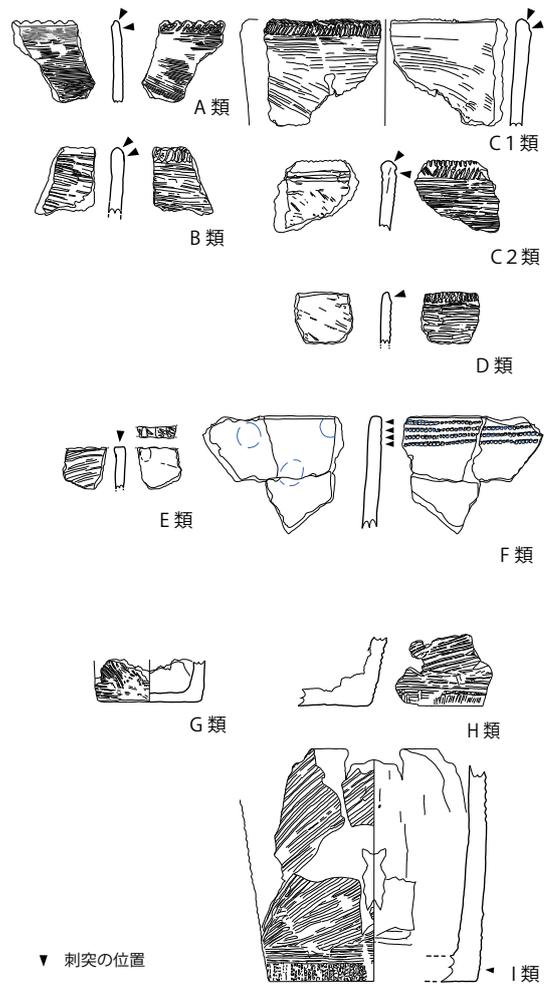


Fig. 28 出土縄文早期土器の分類 S=1/6

H類：器形はG類とほぼ同じである。外面の調整は、横位もしくは斜位の貝殻条痕の後、縦方向の貝殻条痕を施している。

I類：外面は、斜位の貝殻条痕の後、底部付近のみ縦位の貝殻復縁刺突文を1段施す。内面は縦方向のケズリによる器面調整である。

口縁部は岩本式から倉園B式があり、前平式土器が多い。底部の特徴もその型式内におさまるものと思われる。したがって、本調査区4・5層は、岩本式から倉園B式段階の遺物包含層であり、これらの層から出土した石器類も縄文時代早期前半段階に帰属するものと推定される。

参考文献

新井房夫編（1993）『火山灰考古学』古今書店

（株）加速器分析研究所（2010）「鹿児島大学構内遺跡郡元団地，桜ヶ丘団地における放射性炭素年代（AMS測定）」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報24』26-28

桑波田武志（2001）「岩本式土器から前平式土器へ—移行期の土器に注目して—」『鹿児島考古』第35号11-26.

新東晃一（2008）「早期南九州貝殻文系土器」『総覧 縄文土器』小林達雄編 186-193

H. Moriwaki (2010), Late Pleistocene and Holocene tephras in southern Kyusyu, Active Tephra in Kyusyu, 2010, International Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Volcanism and Human Activity, 44-53.

鹿児島大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 第7集

**鹿児島大学構内遺跡
桜ヶ丘団地 F・G-10 区（中央機械棟）**

2012年3月発行

編集・発行 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
鹿児島市郡元一丁目 21-24
TEL 099-285-7270

印刷 溯上印刷株式会社
